青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜　第二年第十一號目次

わが少年（歌）……原田琴

近代人の告白（ミユツセ）……野上彌生譯

髮（長篇小説の序にかへて）……杉本正生

沈默（アンドレエフ）……増田初譯

東の渚（詩）……伊藤野枝

氷蓮（小説）……加藤みどり

青鞜社詠草……同人

おさみ（小説）……藤岡一枝

汗ばむ頬（歌）……岡本かの

メールストロム（ポオ）……らいてう譯

群衆のなかに交つてから……紅吉

二十世紀……松居松葉氏譯

冷たい寵物（詩）……紅吉

編輯室より……同人

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが少年――原田琴

弟と抱くはかなし戀人といはんもあはれいと
けなき君
導きぬやるせなげなる少年を黑髮の世に渾沌
の世に
この胸のいと廣やかに果てなきをわが少年は
さまよひてなく

わが毒を君は吸ひけんしみ〴〵と泣く少年と
なり給ひぬる

毒の蛇身をかむごとしはげしかるわが少年の
晝のくちづけ

ほがらかに相向へどもしめやかに己が泣く夜
を知らぬ戀人

泣かれけりわがくちづけに足るごとくことや
すげにも君のたまへば

この戀のうらさびしさやゆるしたる親々のみ
を背景とする

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ダアリアはふるへてありぬ戀人を殺さんとい
ふ夢のかたはら

かぎりなくくちづけをして飽き足らぬ男の戀
に身の細る秋

悔ゆることいとしきりなりなほ彼につながる
ものとこれもかなしき

爪彈の三味のやうにも雨ふれば捨てたる人も
うら戀しけれ

ふところ手年增がなげく心よりいとしめやか
に秋の雨ふる

七人をわれゆるしけり七人にわれ捨てられぬ
いとよろしけれ

伏して泣く男を見ればいかばかり心よきかと
ふと思ひたる

はなやかに人とありきて月うすき卯の花垣に
つと消えしこと

また逢ひぬかかとにからむ草のごとふみしだ
きてぞ走りし人

たまさかのこのなまぬるきくちづけをあはれ
貴くめでたしとする

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

涙來てわが心をば洗ふ時殘る男のなきもさび
しき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

近代人の告白(つゞき)——アルフレッド・ド・ミユッセエ——

此處に名高い西班牙の芝居がある。その芝居では天から送られた石像が一人の放蕩息子と會食をしに來た。放蕩息子は出來るだけいゝ顔を見せて何氣なくつとめてゐたが、石像が握手を求めたので、手を與ふると、死ぬほどの冷たさにとりつかれた氣がして、けいれんを起して打ち倒れてしまつた。

私は今日まで友達やをんなに信用を置き切つてゐたのに、突然自分が欺されてゐたのだと云ふ事を發見した時は、いつもその發見の結果はたゞその像の握手に比べられ得るのみである。疑ひもなくそれは死ぬばかりの冷たさと、凍りつく接吻をもてる大理石の印象であつた。石人の感觸であつた。あゝ此恐るべき客人は幾度も私の戸を叩いた。我々は幾度も一緒に會食した。

申合せがすむと私の相手と私は、双方の位置を極めて、それから靜かに歩みよつた。彼が先きに火蓋を切つた。而じて私の右の腕を傷づけた。私はすぐとピストルを左手に持ち換えたが、それをさし上げるほどの力がなかつた。而して膝を突いて倒れた。

その時私は相手がひどく興奮した樣子でまつ靑な顏をして忙しく進みよるのを見た。同時に私の介添人は私の傷づいたのを見て、私の方へ走りよつた。相手の男はその介添人たちを拂ひのけて私の負傷した手をとつた。齒を喰ひ締めてものもえひ得なかつた。私は彼の苦悶を見た。彼は人間の苦しみ得るかぎりの最恐ろしい苦悶に苦しめられてゐた。『どいて吳れ』と私は怒鳴いた。『早く行つて――のシイツの上で甲羅でも干すがいゝ。』

彼は息をつめた。私も息をつめた。

私は馬車に載せられた。馬車には醫者がゐた。傷は銃彈が骨に觸れなかつたから危險なものではなかつたが、それでもすぐと繃帶をかけることが不可能であつた位ゐ私は亢奮の狀態にあつた。馬車が動き出した時、私は戶の側に打ちふるふ手を見とめた。それは引き返して來た相手の手であつた。私は彼への返答としてはたゞ頭をふつたのみである。彼の後悔は本統のものだとは信じたのだけれども、彼を赦そうと努力してもそれが出來かねる程に私は激してゐたのであつた。

家に歸りつくと腕から氣まゝに溢れてゐた血汐は、ひどく私を樂にして吳れた。と云ふのはその疲勞で傷以上に私を痛めてゐた憤怒から私を救つてくれたからであつた。私は悅んで寢床についた。私はその時に貰ひ出した水の、のツけの一杯ほど嬉しく飮んだものは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これまで何んにもなかつたように思はれる。

寢床につくと熱が出た。それから涙が出だした。をんなが私を愛するのをやめた事は私に考へられるが、彼女が私を欺したわけは考えられない。何故に義務とか利益とかで强ゐられてゐるのでもない女が、他の男を愛すると云つて、一人の男を僞はり得るだろうかと云ふ理由が私には呑み込めなかつた。私は日に二十度も尋ねて見た。

『デゼネー、どうしたつて云ふんだろう。若し僕が彼の女の亭主だとか、それとも金を出してるんだとか云ふんなら、をんなが僕を欺ますわけも分る。併しもう僕を愛しないのなら、なぜ僕にそう云はないのだろう。なぜあの女は僕を欺したんだろう。』

私は戀愛に關して噓を吐くものがあろうとは會得されなかつた。私はまだ子供であつた。而してまだそれを會得するには不適當だと云ふ事を認めなければならない。私は女と戀に落ちると、いつもその度に女に打ち明けた。戀をよした時には又その度に同じ眞心をもつてその事をうち明けた。それは戀と云ふようなものに於ては、何事も自分一人の氣まゝには出來ない。而して噓を吐く事が唯一の罪であると常々考へてゐたからであつた。

デゼネーは私の尋ねる物毎に返答してくれた。

『あの女はあばずれだよ。もうあの女には逢はないと僕に約束してくれ玉い。』

私はおごそかに彼に誓言した。彼は又をんなへ手紙を書かないように、たとへ女を責めつける手紙でも書かないように、而して若し女から手紙が來ても返事を出さないようにと忠告した。私は彼のたのみに驚いて、私を彼が懸念してゐるのを殆んど腹立しく思ふほどで悉く彼に約束をした。

併しながら、私が起き上る事が出來て部屋から出かけた時に一番にした事は、私のをんなの所へ逢ひに行く事であつた。私は彼女が一人でゐる所へやつて行つた。居間の隅に椅子に座つて顔を下に向けてひどく物惱ましげな樣子をしてゐた。私は猛烈に女を責めつけた。私は絶望の餘りに夢中になつてゐた。家中のだれにも聞きされるほど聲高く叫んだ。そうかと思ふと、幾しきりも涙が激しく流れ出て、ものが云ひえなかつたので、床の上に打ち倒れてほしいまゝに泣いた。

『ふてくされ！あばずれ女！』私は涙の中から云つた。

『おい、僕は死ぬかもしれないよ。そしたらお前はさぞ嬉しいだらう。一體僕が何をしたと云ふんだ。』

彼の女は私の頸のまわりにとりついて、斯んなことを話した。彼女はそゝのかされて連れ込まれたのであつた。絶體絶命の晩餐會で私の相手に醉はされて了つた。けれども彼女

は決して彼の者ではなかつた。彼女は、ほんの一瞬間身をまかせてあやまちは犯したけれども、決して罪を犯したのではない。自分のしたいけなかつた事はみんな氣がついてゐるから、若し私が許してさへやれば彼女だつて死に度いんだと云ふ事を話した。彼女は眞心からの悔後の涙を潤らして、私を慰めようと悲しみの中から言葉のくぎりを盡した。私は彼がまつ青に物凄くなつて、着物をふりほどいたまゝ、肩に髮の毛を打ち散らして部屋のまん中に膝まづいた時ほどの美しさをこれまで見た事がなかつた。此光景に感覺がさまされたようになつて、私は恐ろしさに震えた。

私はものを見る事も歩く事も出來ないほどに疲れ果てゝ外に出た。もう二度と決して彼女に逢ふまいと心に願つた。併し十五分間立つと私は引き返した。どんな死物狂ひの力が自分を強ゐてるのか自分には分らなかつた。私はもう一度彼の女を我物にしよう。彼女の華麗なからだからその苦い涙を飲まう。而してその後で一緒に死んでしまうと云ふ強い望みを持つた。私は彼女をいまいましく思ひながらも、それでゐて崇めてゐた。彼女の戀は自分の損失であるが、それでもあの女なしに生きて行く事は不可能だと感じた。私は光り物のように女の部屋に駈けつけた。召使ひにもことわらずに勝手を知つてるのでずんずん這入り込んで、彼女の居間の戸をあけた。

私は寶玉で蔽はれてゐる化粧臺に向つて身動きもせず座つてゐる彼女を見つけた。小間使ひに髮をとりあげさせながら、彼女は紅い巾の小切れを握つてそれでそつと頬の上をなすつてゐた。私は自分は夢の中にゐるのか知らと考へた。私には此が十五分間前まで床の上に打ち倒れて、悲しみに押しつけられてゐた女だとは思はれなかつた。私は像の如くつッ立つた。彼女は戸の開くのをきゝつけたので、ほゝ笑みながら頸をふり向けた。『あなた、だつたの？』と彼女は云つた。女は舞踏會に行くところなので、連れて行つてくれる筈の私の相手の男を待つてゐたのであつたが私だつたので眉根をよせて、唇を閉ぢた。

私は戸口の方へ一足歩ゆみよつた。私はダイヤ入りの櫛で髮を留めてゐる、しなやかな香料のかほる頸筋をながめた。此頸は活力の座で、地獄よりも黒かつた。二ツの艶のいゝ捲髮が、銀の房を光らして頸にからまつてゐる。彼女の頸と牛乳よりも白いその肩とは、彼女のあり餘る髮毛とよくうつり合つてゐた。こうした髮の結ひぶりは、一瞬間前にながめた時の私の迷ひ心を引き立てるらしく見えるみだらな美しさがあつた。私は突然一足ふみ出して、握り締めた拳の脊で此頸を一うち打つた。そんなは泣き出して私が飛び出した時に前にのめつた。

家に歸りつくと又熱が出て、餘義なく寢床に着かなければならないほどに激しかつた。傷は再發した。私はそれがために非常に苦しんだ。デゼネーがあひに來たので、私は一部始終を彼に話した。彼は默つたまゝ聞きとつたが、どうしようかと思ひきはむるように、暫時の間部屋を歩きまわつた。終に彼は私の面前に立ちどまつて、而して大聲で笑ひ出した。

『あれが君のはじめての女かい。』

と彼は云つた。

『いゝや。』と私は返事をした。『最後だ』

夜中頃になつて、落ちつかぬ眠りの中にゐるうちに、私は夢のうちに深い溜め息をきいたように思はれた。私は目をあけた。而して私の寢臺の側に私のをんなが腕を組み合せてまぼろしのような風に現はれて立つてゐるのを見た。私はそれは私の亂れた腦の工合だろうと信じたので、叫び出さずにはゐられなかつた。私は寢床から飛び下りて部屋の向ふ側へとんで行つた。彼女は、

『私なのよ。』

と云ひながら近づいて來て、私の腰に手をかげて引き戻した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何をするんだ。』と私叫んだ。『離してくれ。今ならお前を殺せるんだぞ。』

『よござんす。さア、お殺しなさいよ。』と女が云つた。

『私はあなたを欺して嘘をつきました。私は惡かつた。間違つてゐました。でも私はあなたが可愛いゝんです、離れる事は出事ませんよ。』

私は彼女をながめた。何と云ふ美しさだろう。彼女の全身は震えてゐた。眼は思ひあふれて快樂の早瀨を注ゐでゐた。咽喉はあらはで、唇は燃えてゐた。

私は彼女を抱きあげて、抱きあげながら云つた。『まアいゝさ。僕等を見てゐらつしやる神樣の前で、又父さんの心にかけて誓ふが、僕はお前を殺して僕も死んで了んのだ。』

と棚から食事用ナイフを取り下つして枕の下に入れた。

『ね、オクターヴ。』彼女は私に接吻しながら微笑して云つた。『馬鹿な眞似はしないものよ。ね、いゝ子だからね。こんなさわぎをするから惡くなるんですよ。まア熱の高いこと、そのナイフをこツちへおよこしなさいよ。』

私は彼女がナイフを取りたがつてゐるのを見とめた。

『僕の云ふことを聞いてくれ。』と私は云つた。『僕はお前が誰なんだか知らない。又お前がごんな狂言をしてるんだか知らないけれども、僕にとつては大眞面目なんだ。僕は地球

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上で男の戀し得るだけの戀をお前にしてるんだ。そしてお前を死物狂ひに戀してるんだ。それがために發月も見れば死ぬる生きるの端目にも落ちた。お前は又お前が僕を可愛がつてるんださ云ふ事を云ひに來た。僕は嬉しい。併しそれにも拘はらずこの世界には神聖な或物がある。もし僕が今夜お前の戀人だつたら、誰も外に明日お前の戀人にはなられない筈だ。斷じて、斷じて。』さ私は繰り返して、『僕は二度さ再びお前を僕のをんなにはしない積りだ。さ云ふのは僕はお前を愛してゐるだけそれだけお前を憎んでゐる。お前さへ異存がなけりや僕は明朝お前を殺してやる。』

こう云つた時に私は殆んご夢我夢中になつた。彼女は外套を肩に引つかついで走り出てしまつた。（未完）

野上彌生子譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

髪　—杉本正生—

季節は尤もわたしの愛好する十月に入つた。秋光の蒼白きまたゝきは間斷なく午後のわたしの寓居を照らす。ああ、何と云ふ淒慘な秋の音であらう、杜には悲しく鳥もなき小草も哭くであらう。街道では營みのために生活のために人々は樣々の事象を開展しつゝ暮れに近づく年を一日一日と刻んで行く。

今わたしの文机の側にはわたしの斬り捨てた髪の束が古新聞に包まれて置かれてある。二十幾年の年月にわたしの肉と共に伸び成長した丈ながき髪は、黑髪は、尤も醜きものの象徴の犠牲となつて了つたのである。女性としての罪惡でありいむべき事の總てを、人情の嶮怨と淒慘の極みとを嘗め盡し味ひ盡し限つたわたしはなほも此世の光りが此醜き軀の總てに降りかゝる日を希ひ想ひ而してなほも生きながらへる事を思ふのあまり年久しくわたしの形ちをつくらひわたしの媚の全部を象くりし丈長き黑髪を肉の生命の身がはりとして剪り棄てたのである。剪る時には弱く而して卑怯と愚劣なる手始に慣性せるわたしは生命の身がわりと思ふがために惜しむ閑もなく男の需めに應ひつついとも速かに潔よく、而し

て力まかせに剪り取つたのであつた。此束の殘りは周圍から掻き上げて辛じて細かき櫛の齒で此の短かき毛髪の先端を止め得る程の哀れな姿となり終つた。わたしの夢には今もなほ銀杏返しに派手な半がけをかけた頭の姿がわたしとして通つて來る。戀人であり良人であると希ひ望む其人と其艶かな髮の姿して物語るのを夢みるのである。黎明のほ白き薄明りが仄かにさし入る冷たい房の床に孤獨なる身を熟乎かき抱きつつ夢より眼醒むる時、わたしの髮は軟かな枕の上に散亂れていとも荒じき形ちに流れ散つてゐる。もうわたしは生涯に異性に與ふべき媚の悉くを失つたものとなつた。形に於ても、心に於ても。而して媚よりあがなひ得る處のものも全く途絶えたと同時に需めんとする力も實に强烈なる對抗力をもつて斥け得らるる樣になつたのである。

いつの世にも公平なる自然の大光は搆はずわたしの眼の前に漲渡つてゐる。わたしは其中で人情として尤も暗黑なる醜罪の總てを物語り、而して夫れに陷り行きし道程の心緒と行爲を叫び訴へるが如く披瀝して而して讀者の悉くに肯定を希はんとするものである。此の如く醜く哀れに、狂者の如く理智と慣性を失へるわたしは、なほ生に執する前後の欲求のために、偏と公平との兩面に安佚の隙を窺ふさかしく健實なる人々のみまへにひれ伏し慟哭して事の始終を告げ止まないのである。夫れと共に此告白文の一編をかゝんとするの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

理由はなほ他に多々存するのである。それはわたしはも早光輝ある此世の繁榮と享樂とを希み得られぬ身となり終つたが故に、なほ此上自業を深く包みひめつつなほ粧ひ媚びて人々を愚弄するの武器を失ひ了りたるが故に、此告白は毫もわたし共の價値を減却せぬばかりか、轉々として來し豊饒なる越歷の過去を只一本の鍬の鋭き尖端もてほぜり出すよきてだてともなりなほ、其上此後の歩行の東西の方向をさへ失ひ盲(めしい)たるわたしは、有力なる人々の導示の儘に從はねばならぬ。其唯一のよき上告文に他ならぬと思ふのである。而して同時に此れによつて得たる反響は二十三年に生を受けたるわたしの人として女としての位地を定むるに歩行を定むるにこなき手段と思ひ信ずるからである。而して更らに其歩行は又もや過去と異なりたる新らしき思想を生み產るに相違ない。

髮を剪り、わたしの裏面の醜行が悉く市内の新聞に大書されて誹謗の極みを受けてから已に一ケ月になる。わたしの樂しき運命の幕を斷り下した日は實に九月の十五日の早朝から夜にかけて行はれた。まこと去月の今日の夕方には大阪の本社の樓上を訪問しつつ、京にある愛人の上を思ひ心を急がせたものであつた。其日は秋雨そぼ降り、日本全市の街道は悉く哀弔を表し奉るがためにいとも嚴肅と悲哀の極みにとざされてゐた日であつた。かしこくも尊き極みの大葬の行はる日に於てわたしの罪業は最終の日を經てゐたのである、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事の發覺は其翌日である。

　けれども斯く書き出す前に、わたしはわたしの小說の形式を借りてわたしの過去を描き追憶も、哀しき記念の烙印も悉く露吐せなければならないのである。けれどもわたしの行つたるは悉くわたしを圍繞するあらゆる親近の人々より投じ與へられた事件の連鎖に他ならぬ。して見ればわたしの告白が夫れに關聯する人々の名と影とを亂し犯す虞れがある。わたしは尤もよき事を行はんとして而して又尤も不忠實なる事を他の人々に加へなければならぬのである。夫れ故にわたしは其關聯する人々の名を秘し而して誰人と讀者に氣付かれぬやうに粧ひ技巧して上手にごまかさねばならぬ。夫れをなしても悲しき事は我母の名である。我母はわたしの生の陰影である。辛辣なるわたしの行爲の數々のかげと光りに現はれ來し母の名をも痛ましき事象に依つて傷け而して描き出さねばならぬ。

　けれどもわたしは茲まで決心して此告白に取りかゝらんとするまでには實に三十日を費して考へたのであつた。其間には知己の二三より溫き言葉の數々を盡して慰めを受け與へられた。全く二三の知己である。わたしは可なりの友と而して異性の親交者を持つてゐる。けれども事の起りの我市の新聞の總てに告げ披げられてより顏をも見せて吳れぬ友、音信も途絕えた友、其他は悉く嘲笑と侮辱とで嫌怨せぬ人はないのである。其幾多の悲し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みの中よりいとも美しき涙もてわたしを撫はる可く眞菰が原の寓居に夜を犯して來し一人の親愛なりし人は嘗てわたしが其人のために忍びて其人の愛の手を斥けたといふ最も意外の來訪者であつた。尤も、わたしの現はれたる行爲にも性格の上に於ても、さほど貴き友に乏しき事は自然であり又わたしの撰び來し道かも知れぬ。恁う考へ至ればなほ更らわたしは悲しまねばならぬ、わたしは只の人を、何等の關(かゝはり)をも有たぬ、而して共鳴の乏しき人々を慕ふにはあまりにわたしの越歷はわたしの人情を嶮路に導き女性として最も貴ぶ可くなくて叶はぬ可憐といふ情緒の悉くを拔き取られて了つてゐる。一人の愛人からわたしは最後の鍵を預けぬ女であるといふ程の語をわたしの批評語に使つて呉れた。夫れほどわたしは人に手渡さぬ秘密が豐饒に藏蓄されてゐた樣なものである。何といふ哀れにいたましく卑しく暗らきわたしであらう、けれどもわたしは次第にかき移して行くわたしの成長(おひたち)の意義ともなるものはわたしが如何にして恁うも暗き道を撰び世の常の人情に背き、而して已に固定された最も安全なる倫理の上にも拗ねねたみ避けたといふの一つである。事件は世の多くの事象に已に古くあり傳へられた最も平凡なる普通事にすぎぬ、只夫れに陷らしめし意義こそわたしには唯一の生の味方である。此れなくばわたしは何うして此後の生活を營み盡す事が出來得やう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

下河原に近き棲ひ故、鴨東の美しき舞妓は姉妓の意氣な羽織の袖口にかくれて鈴の音を響かせて通る。其他澄みわたる秋の街道の白き光の中を袷の裾さばきうすら冷げに、悠然(ゆつく)りした京辯の乙な話しを交しながらわたしの家の格子戸をすれすれに通り行く樣々の女、わたしが夫れほど美しい女に眼を注ぐといふ事は何とはなしに極めて衝動的に髮の姿に眼を止めるからの事である。何といふ愚劣な悲慘なわたしであらう。髮を剪り取つたといふ事は全く髮其ものに何等の執着ももたぬしるしであつたのに、今となつて此短かき先端の一分づつ伸び行く日を待ち焦れずにはゐられない。再びわたしは媚もて異性の遊戲に此身を玩具に捧げやうとは思はぬけれども、けれどもわたしは依然として髮は惜しい。

妾の容姿は實に醜く出來てゐたけれども髮のみは赤味をも帶びず、柔軟にくせなく、順しく伸び自由に結ぶ事が出來た、其他わたしは異性と作る遊戲に於て相手より以上に克ち誇る幾多の武器を才能に於て持つてゐた事は他の女性の人達ちと撰ぶ處はないと思ふ。わたしが其一部分を失つたといふ事は再び異性と戲るる日をなくしたといふに依る悲しみでは更らにない。遊戲に飽きたわたしは更らに又生眞面目なる道に入るか、然らずば固定されたる倫理上の常道に踏み入るかの二途であるけれども、何としてもわたしは過去に通つた道を再び歩まうとするほどの努力はもう何處を探しても現はれて來る事はなからう。わ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たしはわたし自身の罪業を全く無意識にやつて了つたのではなくて深く深く空想に依つてやつて來たのである。夫れだけわたしには可なりの勢力が拂はれてゐる。一人の人を愛するに先立ち、男より次ぎの男に移り行くわたしの瞬間の囁きまでわたしは全く茫然として事象に沒頭して了つてゐたのではなかつた。小さき花瓣に倚する心の水の匂ひまでわたしはかなりの撰擇の後に起る止みがたき愛慾の結果であつた。嘗て此事あつて以來良人とたのみし男からは過去を悔ゐよと嚴しき詰責の矢を放たれて迫められた。しか云ふ男の社會上の位置なり職務なりを思へば其人の根底に橫たはる思想を毫も不合理とする事は能きぬ。けれども世間普通の一些事として過さるるならばわたしは淋しく微笑して默するであらうけれども、夫れが最大なる不倫の行爲として迫められる時に於てはわたしは沈默して夫れに屈從しやうとはせぬ。一人の男の加護に依つて生活の安體を保つてゐた女が他の愛する男にその醜劣なる身の上を祕めて愛慾を貪つてゐたとする時に、夫れがどうして克ち誇れる此世の道程なり美しき人情なりといふ事が出來得やうかとの詰責は表面まことに曲折なき正當の論法である。けれども今更ら夫れほどの平坦なる論據に屈服し任從しやうとするにはあまりにわたしはわたしとしての信念をより以上に有しすぐしてゐるのである。此世の隅々までをも照らし止まぬ太陽の光りの前に、わたしの影は只一つなること等しくわた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しの經べき越歷はわたしの過去を除いて他に決して撰ぶ事は出來ない筈であつたわたしの個性が作るわたしの思想は、遂にわたしの一本の道を與へて去り、而してより他の道を悉く否定して行つたのである。夫れと同樣にわたしの未來までをも疑ふわたしの約したる良人となる男は此事あつて以來二三の通信と、二度の會見とより遂に何の消息をも送らなくなつた。世の常道に背かぬ樣に、社會上の平坦なる地位を失はぬ樣に、夫れが此世の權能であり嚴しきおきてであると思ふ人の行爲でありとすればわたしは些かの不平も不滿足をも起すものではない。わたしの行爲は人に容れられずとも、せめてわたしは人の行爲の悉くを肯定し了解したいと希ふのである。渾沌たる大海である此世の事象に比べて女の一生ほどいともささやかなる一塵にすぎざる如く我知る人々の行爲をもまことに安價なる、而かもいなむべからざる自然のまことなる一事象とせなければならぬ、友の凡てより愛人より遠ざかりたるわたしは淋しみの極みに人を憾むより先立ちてまづ遠かり行きし人々を肯定し、而して偏狹にも安體を求むる人かなと思はねばならなかつた。

　わたしは如上の序文を了はりて次ぎに小說の形式を借りて述ぶる妾一生の描寫に盡さなければならぬ、乏しき才能と貧しき讀書とは迚も人々の共鳴を得るに至難なるはいふまでもなく此著述も全く徒勞となり了はる事は毫も疑はず豫期する處であるけれども、何かは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

知らず文藝を愛好するあはれなるわたしは空想にて作る事象の描寫よりも、手近きわたしの眞寫がより以上の興味を起し、なほ前文に言ひたる如く告白の止むなき機會に遭遇するのために敢て此徒勞をも惜しまないのである。

而して事の起りは總て過去の連鎖である如くわたしの今日を作りし過去はなほも以前なるわたしの乙女時代より起さねばならぬ。此荒みはてたる情緒をもて善しき茲柔かなる草花の如き少女時代が果してよく描寫し得るか否かを疑はねばならぬけれども、而してよし描し得るとしてもわたしは實にめくるめく程の熱き涙を流しつつ過去のわたしを撫で親しまねばならぬ。而して次ぎの時代に來た時にわたしは果して過去を何の技巧をも待たず何の色彩をも加へず赤裸々に描寫し得るか否かを疑ふほど、わたしの虚榮を満足えさせぬ浮世の暗き臭氣の中に腐爛せる事柄で充盈してゐるのである。而してわたしは様式を强き印象の連鎖で統一して行かうと思ふ。

印象の中には花やかなる戀もあり、舞妓に狂ふ美術家もあり、浮れ男に戯るる未亡人の哀しき色狂ひもある。夫れ等が全く田舍と都會の中間に位する受動的の靜謐なる京都の景物を背景とするに至つては何かは知らず我温き古郷を欺く如く不德のきわみを行ふ如き心地に充たされる。京都は人情の土地ではなくて全く景物によつて活きてゐる土地であるの

に、わたしは其貴き部分を悉く盡し得る事の出來ぬ憾みをまことに深く自身の上に降り注ぐのである。

序文に續けてなほ本文に入り度いとは思ふけれども本誌の編輯の都合もあり紙數の長さを虞れて本月號には此文だけで終らふと思ふ。同時に習作はもう止める事とした。來月號からは全く自身の血と肉とに依つて生れ行く俗惡なる告白が幾月に渡つて了うかは知らぬけれども極めて誠實なるを希ふために年月を惜しまぬ覺悟である。

營みのために時間の一分をも惜しまねばならぬわたしは仕事の閑の三時間を偸みて此一文を走りがきしたのである。明日からは醜き姿で仕事に從事する傍らに追憶を逞しくしつつ、小説の構想を統一して行くであらう。文の荒まじく潤ひを含まぬ亂調なるは時間に乏しきばかりでなく情緒の荒れすさめるに依るものにてなほ世と身を咒ふ恐ろしき叫びをしづかに默許しやうとする苦しき反撥の忍耐から、創作に從ふ情緒の準備をも缺くからの事である。

わたしの母が挿して呉れた艶やかなダリヤは今わたしの文机の上を彩どつてゐる、濃かなる愛慾の象徵の如く色赤きダリヤの重げなる花冠は、愛人の肉を求むる怨女の唇の如く光り強く燃えて凝乎とわたしの眸をみつめる。ああ、わたしは此花を見るに得たえぬ。

——大正一年十月十五日午——髮の序文として——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沈默（アンドレイフ）――増田初譯――

一

五月の或る月影の明るい夜、外には鶯が歌つて居た時、父イグナシアスの妻は夫の室へ這入つて來た。彼女の顏には苦痛の色が表はれてゐた。小さな燈火を持つてる手は顫へて居た。女は夫に近寄りさま、その肩に縋つて、せき上ぐる啜泣の中に漸く云つた。

「貴方、ベロチカの所へ行きましやう」

振り向きもしないで、父イグナシアスは只眼鏡越しに殘酷な目を以て妻を眺めた。いつ迄も凝つと眺めてゐた。遂に女は空いてる方の手を動かして、低い据え付け椅子へ倒れるやうにかゝつた。

「何て殘酷な人なのだらう」

殘酷といふ句に力を入れて女は低く云つた。そしてそのよく肥えた顏を苦痛と憤激との爲めに歪めた斯うして彼等――夫と娘と――が如何に殘酷な人達であるといふ事を一層よく思はせ度いと欲してるかのやうに。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

父イグナシアスは微笑を浮べながら立ち立つた。書籍を閉ぢて眼鏡をはづして箱に收めてからしばし冥想した。銀糸の所々に織り出されてるその長い黑い鬚は彼の胸の上に威めしく垂れてゐて、深く呼吸する毎にかすかに打ちふるえた。

「サア行かう」と彼は云つた。

妻のオルガ・ステパノバは急に立ち上つて、訴へるやうな臆病な聲で願つた。

「只、娘を叱る事だけはよして下さい。あれが何んな人間か貴方御存じでしやう。」

ベラの房は一番上の屋根裏であつた。狭い木の階段は父イグナシアスの重き足踏みにたゆみきしいだ。丈け高いがつしりとした彼は上層の床につかへぬやうに頭を低くした。そして妻の白い上衣が自分の顔にさはつた時につまらなそうにしかめ面をした。ベラと話したつて何も分るやうになりはしないと彼はよく知つて居た。

「何うして入らしつたの。」露出しの腕を眼の高さまで上げながらベラは云つた。片方の手は、白い半透明な冷たい色をした織物とよく似て居る。眞白い夏毛布の上に置かれてあつた。

「ベロチカ」と母は口を開いた。けれ共啜泣きにあごは緩かなかつた。

「ベラ」父はそのしやがれた厳格な聲を力めて柔らげながら云つた。「ベラ、汝は何を氣に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して居るのだ、私に云つて御覧。」

ベラは何も云はなかつた。

「ベラ、汝は御母さんや私を信ずるに足らぬものと思つてるのか。私達は汝を愛して居ないと思ふのか。又は私達よりもつと親しいものが汝にあるのか。汝の心を痛めてる事を御話し。そうすれば吃度汝の心持はせい〳〵する。亦私達だつてそうだ。年とつた御母さんを御覧。何んなにか心配してゐるのじやないか。」

「ベロチカ。」

「そして私は……」しやがれた聲は何ものかに遮られたやうにふるえた。「そして私は……私だけは安必してゐると思つてるのか、汝の心に喰ひ入つて行く悲しみを知らないでゐるやうに。そしてその悲しみは何だ、汝の御父さんは何だがそれを知らないのだよ。それでもいゝのか。」

ベラは沈默つて居た。父は鬚をひねりながら、それを知らぬ間に指でこんがらかさないやうに氣をつけてゐた。そして尙ほ續けた。

「俺の命令にそむいて汝はセント●ピータースブルグへ行つた。その時、云ふ事をきかなかつた汝を俺は叱つたか。又は汝に金をやらなかつたか。又は私が不親切だつたと云ふの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。さア、何故默つてばかり居るのだ。汝はセント・ピータースブルグへ行つたのじやないか。」

イグナシアスは口をつぐんだ。花崗石で出來た巨大な怖ろしい或る像、見えざる危險と見知らぬ無頓着な多くの人々とで充たされてる怖ろしい像が、その時彼の心に浮んできた。其處にか弱いベラ只一人行つたのだ。そして其處に我々は娘を取られて終つたのだ。その怖ろしい神秘的な都に對する憎みと、強情にもの云はぬ娘に對する怒りとが、父イグナシアスの心にむら〳〵と起つてきた。

「セント・ピータースブルグはそれとは何も關係はありません。亦それは私とも何も關係はないんですよ。もう晩いからお寢みになつたらいゝでしやう。」とベラはあら〳〵しく云ひ切つて眼を閉じた。

「ベロチカ、可愛いゝ娘や、私にだけ白狀おし、ね！」と母は涙をすゝり上げた。

「アヽもう、お母さん。」ベラは耐へられぬやうに遮ぎつた。

父は椅子に腰を下ろして大聲で笑つて、

「よし、そんなら何でもないんだつた。」と皮肉氣に尋ねた。

「お父さん」娘は枕から身を擡げながら鋭く口をはさんだ。私がお父さんやお母さんを愛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してる事は御存じでしやう。それなら、私はもう疲れたしだん〳〵晩くなるからお寝みなさい。私も寝度いから。明日か又今度一緒に御話しましやう。」

父は、刺激されたやうに、椅子が壁に打つかる程急に立上つて、妻の手を取つた。

「行かうじやないか。」

「ベロチカや。」

「オイ行かうじやないか。彼女が神を忘れたのなら、俺達だつて………」父は叫んだ。殆ど引きづるやうにして彼はオルカ・ステパノバを房から外へ連れ出した。階段を下りて行くとき、妻は遅れ勝ちに歩みながら低く呟いた。

「彼女をあんなにしたのは牧師たる貴方ですよ。貴方からあんな我儘をおぼえたのですよ。貴方はその責任があります。あゝ、私は何といふ不幸なものなんでしやう。」

そして女は泣き沈んだ。眼が涙に曇つたので、歩踏み外して危く落ちやうとした。彼女自身も下の方の深い底まで落ちて行きたいやうでもあつた。

その日から父イグナシアスは娘と決して口をきかなかつた。娘は別にそれに氣が附いた容子もなかつた。以前のやうに彼女は房へ入つて寝たり散歩に行つたりしてゐた。そしてて眼の中に何か刺激するものが入つてゐるかのやうに始終掌で眼をぬぐうてゐた。此の、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もの云はぬ二人の間に壓迫されつ丶、快活な笑談ばかり云つてゐた牧師の妻は、何う爲たり云つたりしてよいか分らなくなつて喪心したやうに茫然としてゐた。

時々べラは散歩に出掛けた。かの面會の日から一週間目の夕方、彼女は例のやうに出て去つた。彼女は生きて再び見られなかつた。その夜娘は汽車の來る所へ身を投げて身體は二つに礫き切られて終つたのだ。

父イグナシアスは自ら葬式を指圖した。母は娘の死を聞いた時、人事不省に仆れたので教會へは來なかつた。彼女は足も手も舌も利かなくなつて、恰度教會で葬式の鐘が鳴り渡つたとき、薄暗い房に靜と横はつてゐた。人々が教會から出て歌を誦みながら家の傍を通るのを聞いてゐた。そして手を上げて十字架をきらうとしたが手は思ふ通りにならなかつた。「左様なら、べラや。」と云はうとしたが舌は口の中に一杯になつて重かつた。母の樣子は休息してゐるか眠つてゐると人に思はせる程靜かであつた。唯眼だけが元の通り開いてゐた。

教會の葬式にはイグナシアスを知つてる人や知らぬ人や澤山の人々が來た。皆べラの怖ろしき死を歎いた。そして父の聲や擧動の中に深い悲嘆を見出そうとした。人々は彼を好かなかつた。何故なれば彼は嚴格で、傲慢で教會の罪人をその容赦なき心を以て耻かし

め、嫉妬深くて、貪婪で、敎會民から機會ある毎に金を取らうとする習慣があつたからだ。人々は彼が苦惱するのを見てやり度いと思つた。斷腸の思に沈む彼を見、娘の死に對する二重の罪惡――殘忍なる父として、及び邪惡なる牧師として――は彼の肉を罪から避くべからざるものとした事を知るに至つた彼を見てやり度いと思つてゐた。で皆探求するやうな目を彼の上に投げた。父は背後に受くるその注目を知りつゝ、力めてその肥つた强そうな身體を眞直に張つてゐた。心は死んだ娘の上にあらずして自分の威嚴の事を考へて居た。

「兇惡なる牧師。」大工のカルゼノフは頭を振りつゝ云つた。イグナシアスは大工に枠の代五ラブル借りてゐるのだ。

斯くして嚴格は毅然とした態度をくづさずに父は墓地へ行きそして歸つて來た。妻の房の入口へ來て初めて彼の脊骨は少し弛んだ。けれ共それは入口が丈高き彼を入るべく餘りに低かつた爲めかも知れない。白晝の光から急に變つたので容易くは妻の顏を見分くることが出來なかつた。が熟く〳〵見ると、女が餘り靜かでその目には涙の跡もないのに驚かされた。亦その目の中には怒りも悲しみもなかつた。――全く沈默である。羽毛の床の上にのつてゐる肥えた哀れな身體と共にその目は嫌々沈默を守つて居た。

「オイ、工合は何んなだ。」と父イグナシアスは尋ねた。

その唇は唖であつた。目は矢張り物言はなかつた。夫は手を女の額の上に置いた。それは冷たく濡れてゐた。オルガ・ステパノバは手の觸れてる事を知覺してる樣子は少しも見えなかつた。イグナシアスが手を除けたとき、夫を凝と見つめてる動かぬ二つの深い灰色の目は瞳孔が擴がつてる爲めに眼全體が眞黒なやうに見えた。その中には悲哀も憤怒もなかつた。

「俺は房へ行くよ。」夫は慄つと恐ろしくなつて云つた。

彼は應接室を通つた。其處に總てのものは常の通り小ぎれいにきちんとしてゐた。白い被ひを裝ふた高い椅子が經帷子を着た屍體のやうに立つてゐた。一つの窓の上の所に戸を開け放しにした空の金網の鳥籠がかゝつてゐた。

「ナスタスヤ」イグナシアスはどなつた。その聲は自分ながらしやがれてると思つた。娘の葬式の濟んで間もない今、此の沈默の室の内でそんな大きな聲を出したので、心平らかならず感じた。「ナスタスヤ、カナリヤは何處へ行つた。」前よりも低い聲で呼んだ。

「屹度逃げたのでしやう。」

「何故汝は籠を開けといたんだ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ナスタスヤ啜泣きを初めた。キャラコの手巾の端で顔をぬぐいながら涙の裡に云つた。
「あれは御孃さんの魂ですもの。捕へて置いさいてよいすですか。」
父イグナシアスは思つた。頭を傾けて始終歌つて居たあの黄色い快活な少さいカナリヤはほんさにベラの魂であつたのだ。あれが居なくならなければ娘は死んださは云へない筈だつた。そう思つたが下女が一層腹立たしくなつてきて、どなりつけた。
「貴樣も一緒に出て行け。」
そしてナスタスヤが直ぐに房を出て行かなかつた時、再び叫んだ。
「間拔け。」

二

葬式の日から後は沈默が此の小さな家を支配した。それは靜寂ではない。靜寂は只音響の缺乏に過ぎぬ、沈默である。物言はぬ人々は何か云ひ得るが言ふを欲せぬのである。さ斯うイグナシアスは妻の房へ入つて例の凝視に遇ふ度に思ふのであつた。其の凝視は非常に重苦しい樣子を含んでるので、四邊の空氣は鉛のやうになつて頭や背骨を壓しつけるやうな氣がする。さ斯う彼は、娘の聲の印象を思ひ起さすその樂譜を見たり、彼女の書籍やセント・ピーターースブルグから持ち歸つた娘の肖像畫などを眺めたりするさき、思ふので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あつた。父イグナシアスは立ち姿の娘の肖像を常に眺めてゐた。先の畫家によつて強い光線の投げられたその肖像の頬を見るのだ。そしてベラの死顔の頬の上に見止めた、原因の分らぬかすり創を其處に思ひ浮べるのだ。その度にその創の原因を考へて見る。滊車の爲めに受けたのなら頭全體が粉みじんになる筈である、と彼は推論した。であるのにベラの頭は全く何うもならないで居た。屍體が運ばれる際、誰かが足でしたのか、或は偶然折れ釘か何かでしたのに違いない。

ベラの死を仔細に考へると、イグナシアスはその肉をそがれて行くやうな氣がするのだ。だから直ぐ目を轉じて娘の眼の方へ移つて行くのであつた。その長い睫を持つて黒い美しい眼の底には深い影を宿してゐて、その白眼を特別に輝かせてゐた。その兩眼は黒枠の額縁の中に吸ひ込まれて行くやうに思はれた。特異の表狀は有名でもない畫家だがその熟練によつて十分與へられて居つた。眼とそれが見つめてる物體との間に薄い透明な膜があるやうに思はれた。それはピアノの黒く磨かれてる木の光が薄らぐ位にその上に積んでゐる目に見えぬ塵の爲であつたかも知れない。そして父が肖像を何方に向けて置いてもその目は常に自分の方ばかり見てゐるのだ。けれ共それは何も語らない。只沈默つてゐる。此の沈默は聞き取れはしないかと思はれる程はつきりとしてゐた。そして彼は次第に自分は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沈默を聞いてるのだと考へるやうになつた。

毎朝、朝食後彼は應接室へ行き、からからの鳥籠や其の他の見慣れてる物を見渡す、そして安樂椅子に腰を下ろしてから、目を閉じて家の沈默に耳を傾けるのであつた。其處には一種奇怪な或るものがあつた。鳥籠は靜かに優しく沈默してゐる。その沈默の裡には悲しみと涙と遠く消え去つた跡の笑聲とが感じ得られた。妻の沈默は壁を隔てゝゐる爲めに和らげられても、鉛のやうに重く、最も暑い夏の日にも慄つと打ちふるへる程怖ろしく、常に續いてゐた。墓のやうに冷たく、死のやうに不可思議に、娘の沈默は續いた。沈默そのものが互に苦痛を與へ、沈默そのものが恰も怖ろしい望みを以て、言語に逆らうと努めてるかのやうであつた。けれ共機械のやうな一種の強い邪魔ものが沈默を動かさぬやうにして、それを針金のやうに引き延ばした。そして何處かその遠い端で針金は動きだして、低聲で弱々しく悲しげに響き始めるのであつた。父イグナシアスは悦びと半ば怖れながら此の柔かいひゞきを捕へやうとするのだ。椅子の肘掛に腕をのせたまゝ、頭を前の方に出してひゞきの逹するのを待つてゐた。然し響きは破れて行つて遂に沈默になつて終ふのであつた。

「何だ、馬鹿々々しい。」イグナシアスは毅然とした丈高い容子を持しつゝ立ち上りざま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

腹立たしげにつぶやいた。窓越しに彼は、圓い一樣の形の石の敷かれてる、日光を浴びた街と、その直ぐ向ふの倉庫の、長い、窓のない石垣とを見やつた。曲り角に粘土像のやうな馬車の馭者が立つて居る。幾時間も誰一人通る人のない所に何故立つてるのか分らなかつた。

三

父イグナシアスは外へ出ては種々口をきく場合があるのだ。禮拜式の時には舊敎の僧侶や敎會の會員などゝ口をきゝ、又或時は社交會の夕べ多くの知人と語り合ふ事があるけれ共何時でも家へ歸つて來ると終日沈默して居つたやうに思ふのであつた。それは其等の人々とは、ベラは何故死んだのだらうといふ、自分に最も關係深い事每夜のやゝに考へてる事を語り合ふことは能きなかつたからであつた。

彼は未だその事を到底分らぬものと斷念められないで矢張り知らうと努めてゐた。每夜――少しも眠らぬやうになつた――彼は、妻と一緒にいつか眞夜中にベラの傍に立つて、「云つて御覽」と娘に迫つた時の事を胸に畫くのであつた。そしてその言葉を思起して來るとき、其の他の事はもう濟んで終つた事とは思へなかつた。その夜の生きた分明さした光景を暗黑の中にえがいて、閉じた兩眼には、ベラが寢床から身をもたげて微笑をた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たえながな何か云はうとしてる姿がうつつた。何を云はうとしてるのだなう。娘の云はうとして云はなかつた言葉は總ての疑問を解決し得る力があつたのだらう。心臟の皷動を一寸の間沈めてそつと耳を傾けて居たら聞えはしないかと思はれる。それ程直ぐそばのやうであつたが、矢張り聞えない所を見ると絶望的に無限に遠いのである。父イグナシアスは寢床から起き上つて、組み合せた手を振りながら

「ベラ」と叫ぶのであつた。

その答は唯沈默のみであつた。

或る夜、彼は一週間ばかり行かなかつたオルガ・ステパノバの室へ行つて、女の頭の方に座つて、その動かぬ重い凝視から避けながら、

「お母さん、私はベラの事を話したくて來たんだ。分つたかい。」と云つた。

妻の眼は沈默して居た。父イグナシアスは、今迄多くの病人に對した時のやうに聲を張つて、眞面目に力を入れて語り出した。

「私はベラの死の原因を汝が苦にしてるのを知つてゐる。然し考へて御覽。私は汝が愛した程娘を可愛がらなかつたかね。さう思つてるならそれは全く間違つてるよ。私は嚴格ではあつた。それが爲めに娘が思ふ通りに振舞へなかつたといふのか。けれ共私は父たる權

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

威を失つたのだ。娘に罵られた時、あの時私は穩しく頭を下げて娘の室を出たのだ。そして汝は——汝だつて私がもう止せといふ迄、娘の室に居させて呉れと彼女に賴んで居たじやないか。私は娘に殘酷に振舞つたかい。神を敎へ、謙遜を敎へ、愛を敎へてやらなかつたかい。」

父は急に妻の眼を見たが、直ぐ面をそむけた。

「娘が胸に包む悲しみを外に表はして呉れなかつたあの時、私に何うする餘地があつたらう。私は娘に「云へ」と命令しなかつたかい。娘に願はなかつかい。屹度汝は私が娘の前に膝まづいて、お婆さんのやうに泣けばよかつたと思つてるのだね。娘が考へて居た事を何うして私が知る事が能きやう。あの無情な心なしの娘が。」

父イグナシアスは拳こつで膝をたゝいた。

「娘の心には全く愛の心がなかつたんだ。……唯それだけだ。私の思ふ所では、そうにきまつてる……私は壓制者なのだ。娘は汝を——物かなしい顏をして愼しみ深かつた汝を——愛して居たんだ。」

彼は氣のぬけたやうに笑つた。

「汝に對する愛はあつたんだ、汝を慰める爲に撰んだ死は何んなものだつた。無慘な耻かし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い死、彼女はほこりやごみの中にまみれて死んだんだ。——頸を蹴り殺された犬のやうに。」

父イグナシアスの聲は低くしや嗄れて響いた。

「私は耻かしくて耐まらぬ。街へ行くのも耻かしい。祭壇の前に立つのも耻かしい。神の前に耻づる。心なしのやくざ娘。貴樣の墓なんぞごうでもなれ。」

父が見やつた時、妻は全く知覺を失つて居て、それから數時間後正氣づいた。知覺を快復した時その目は沈默して居た。イグナシアスの云つた事を知つて居たかごうか分らなかつた。

恰度その夜、——月の輝いた五月の靜かな暖い死んだやうな夜——父イグナシアスは妻や看護婦に悟られないやうにつま先で歩き乍ら、階段を上つてベラの室へ入つた。ベラの死んでからこつち此の屋根裏の室は窓を閉されたまゝになつてゐた。四邊の空氣は鐵屋根に殘る晝間の熱のほとぼりから來る燒けるやうな輕い嗅ひがして乾燥してゐて暖かつた。一種の鬼氣と棄身になつた氣分の空氣が久しく人氣のなかつた此の室に漂やうてゐた。四壁の板や家具その他のものは長き朽廢の嗅ひをかすかに發してゐた。月光の細い筋が窓の枠の上から床の上に落ちて、その白いよく磨かれた床から反射して室の隅までぼうと明る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かつた。淸い寢床の上には大小二つの枕が幽靈のやうな跡方もないものゝやうに見えた。彼は、近傍の河や花盛りの菩提樹から來る新鮮な空氣、外界の嗅ひを十分室内に入れやうと思つて、窓を開けた。時々合唱してる聲のやうな何とも分らない響きが傳はつて來た。若い人達がボートを漕ぎながら歌つてるのらしかつた。

父は、白衣を着た幽靈のやうに靜かに素足で歩きながら、人無き寢床の方へ進んで行つてそして膝まづいて、――ベラの頭の恰度あつたあたりにその枕を掻き抱きつゝその上に打伏した。彼は長くそのまゝ動かなかつた。歌は次第に聲高く聞えてきてそれから消えていつた。けれ共父は尙其處に居た。その長い黑い髮だけが肩と寢床の上でゆるいでゐた。

月の位置が動いて室の内部は暗くなつた頃父イグナシアスは頭を擡げて、長い間壓へられてゐたそして未だ氣附かなかつた自分の心の内の愛の念を、言葉に全力をいれてつぶやいた。聞いてるのは自分じやなくてベラであるかのやうに耳をすましながら。

「ベラ、オ、可愛いゝ娘。汝は私に何れ程愛せられて居たかを思ひ出したか。ヱ娘、私の心も私の血も、私の生命も。汝の父――年とつた汝の父――はもう白髮頭になつて弱りきつて終つてるのだ。」

父イグナシアスの肩は戰いて、重い身體は全體にゆらめいた。強いて戰慄を靜めながら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小供に云つて聞かせるやうに優しくつぶやいた。

「年とつたお父さんは汝に御願があるんだ。否、御頼みがあるんだ。可愛いゝベラ。今迄一度も泣いた事のないお父さんは泣いてゐるよ。汝の悲しみ、汝の切ないこと それは皆私にもそうなんだ。が私のより深いんだ。」

彼は頭を振つた。

「私のより深いんだね。ベロチカ。私のやうな老人には死なんて何でもないけれ共汝には——自分で優しいか弱い臆病ものだと知つて居た程の汝にはそういふ譯に行かないんだ。一度指を怪我して血を出した時汝が泣いたのを覺えてるかい私の娘や。私は汝が愛して居たこと、大變やさしくして呉れたことを知つてるよ。毎朝汝は私の手に接吻して呉れたね。話して御覧、汝の少さい胸を痛めてる悲しみは何だか云つてお呉れ。私は——此の手で——汝の悲しみを拂ひ除けてやる。ベラ、未だ確固してるよ、此の手は。」

父の髮の毛は打ちふるえた。

「云つてお呉れ。」

父は壁の上を凝と見つめた。そして手を振つた。

「云つてお呉れ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

靜けさは室の内部に充ちた。遙か遠い方に長く引いたきれ〴〵の汽鑵車の笛が聞えた。父イグナシアスは四肢の切〴〵になつた怖ろしい幽靈が不意に目の前に立ち上つたやうな氣がして、開いた眼を一層みはりながら、やほら膝を立てた。その動搖は彼の手、張りきつて固くなつてる手から彼の頭の先まで傳はつて行つた。戸口の方へ一歩踏み出し乍ら彼はきれ〴〵に呟いた。

「話して御吳れ。」

答は只沈默であつた。

四

翌日早く、寂しい朝飯を濟まして、娘が死んでから初めて彼は墓場へ行つた。生温い寂しい靜かな日で明るい夜のやうであつた。彼は常のやうに力めて背骨を直立させて嚴格な態度を持してゐた。自分では平常の通りであると思つてゐた。足が新たに非常に弱くなつた事も、その長い鬚が霜で打たれたやうに眞白になつた事も知らなかつた。墓場へ行く道の長い眞直な街は幾分かつま先上りの勾配をなしてゐて、その端れの所に半圓形の墓地の門が、周圍にぎら〴〵する齒の並んだ、黑い永久に開いてる口のやうに聳えてゐた。

ベラの墓は墓地のごん底の所で、細い砂徑のなくなるところにあつた。父イグナシアス

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は長い事かゝつて、全く忘れられ棄てられて青くなつてる塚の間にきれぎれにある細徑をたどつて行かねばならなかつた。其處此處に年經て蒼くなつてる傾いた墓石や、破れた石垣や、大きな重い石牌などがあつて、執念深い前世の怨恨が之等を破壞して去つたのじやないかと思はれた。そんなやうな石の一つの傍にベラの墓はあつた。新らしい黄色くなつた芝で被はれてゐた。けれ共そのまはりは花盛りであつた。秦皮の木は楓をかき抱いてゐて、廣く擴がつた榛の木の叢はその軟かい粗い葉のついた曲つた枝を墓の上にかぶせるやうに延ばしてゐた。近くの墓石に腰を下ろして父イグナシアスは四邊を見廻はした。雲のない寂しい空をも見上げた。其處には輝く太陽が全き靜けさの中にかゝつてゐた。――そして風は死んで眠つてる木の葉は少しの響きをもしづめてゐた。彼は墓地に漲ぎつてゐる一種云ふべからざる靜けさを身に感じた。そして又もや新しく、之は靜寂ではなくて沈默なのだといふ考が頭に浮んで來た。沈默は墓地の煉瓦塀まで延びて行き、その上を這ひ超えて全市街にみなぎつてゐた。然しそれは只此の灰色の頑固な無理に沈默してる彼の目の中に於てのみの事であつた。

父イグナシアスの肩はゆすれた。その目はベラの墓の上に轉じた。此の新らしい土にはよくついてない芝草の上をいつ迄も見てゐた。その芝は風に曝されてる或る廣い野原から

土と共に移し植えられたのであつた。自分から、二三尺離れてる其處に、その草の下にベラが眠つてるのだとはどうしても思へなかつた。娘に近づいてるといふ事は、心に分明と意識せられるよりは反つて心がかき亂されて妙に胸が動揺した。エターニチーの暗い底に永久に運び去られて終つたものと常も思つてゐた娘は此處に直ぐ自分の傍に居るのだ。――娘はもう居らない、決して再び居るやうにならないとはどうしても思へなかつた。今云はうとしてる事を云ひさへすれば、或は一寸身動きでもすれば、ベラは直ぐ墓から出て來て昔のやうに丈け高く美はしい姿を見せて呉れるだらうと心に思ふのであつた。娘ばかりか、嚴酷な冷たい沈默の中に眠つてる非常に感情的なその屍體迄も起きあがつて來るだらうと思ふのであつた。

彼は縁の廣い黑い帽子を脫つて、亂れてる髮を撫でながら靜かに云つた。

「ベラ」

彼は誰かに聞かれはしないかと思ふと心安からず感じて、墓の上に立つて四邊をきつと見まわした。誰も居なかつたので今度は聲高く繰り返した。

「ベラ」

鋭い詰問するやうな聲であつた。恁んなに力強く發せられた詰問が何の答なしに終る筈

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がないと思はれた。

「ベラ」

その聲は高く固執するやうに呼んだ。それが沈默の中に消えて去つたその一寸の間、何處か下の方から何とも分らない答が發せられたやうに思はれた。父は耳にかゝる長い髪を拂ひ除けて、粗いつきさすやうな芝草に耳を壓しつけた。

「ベラ、話して御呉れ。」

耳の中に何か冷たいものが幕から入つて來て腦髓を氷らせたやうに感じて父は怖ろしくなつた。ベラは何か云つてるやうであつた。――その同じ破られざる沈默を以て物云ふやうであつた。此の心持は一層攻められるやうに苦しく恐ろしくなつた。イグナシアスは遂に首をやけに振つた。顏も身體も青くなつた。四邊が打ち顫えて、沈默の響きから動悸を受けてるやうで、その恐ろしい波は荒れ狂ふ大風に益々吹き立てられてるやうに彼には思はれた。沈默は彼を壓しつけた。氷のやうな波で彼の頭を卷き上げ、髪毛をふるはした。その胸は沈默に打たれてうめいた。頭から足の先まで顫えながら父イグナシアスは鋭いせわしない目を身のまはりに投げつゝ、徐に身を起して長い苦しげな努力を以て背骨を延ばしてその打ち顫る身體に威嚴を與へやうとつとめた。靜かに膝の土を拂ひ、帽子を

かぶり、墓の上で三度十字架をきつてから泰然としてしつかりした歩調で歩いて行つた。彼は平常の途を通らずに途を間違へてるのを知らないでゐた。「ア、俺は異つた途をきてしまつた。」父は小徑の分れ目に立つて微笑んだ。

一寸立ち止まつて見たが、立つて待つてるといふ事は自分には耐へられないので何の考もなく左へまがつた。沈默は彼を導いて行つたのだ。蒼くなつた墓から立ち上つた沈默は灰色の寂しげな其處らあたりの十字架から出る呼吸であつた。死體に飽きてゐる其處等の土の總ての穴からそのかすかな重々しい流れは出て來るのだ。彼は歩調を大股にした。頭が茫として同じ徑を廻つてゐた。墓を飛び超え、柵に躓きちく／＼した金屬性の花飾を握つたり、衣服の軟かい所をボロ／＼に裂いたりした。彼は只逃れ度いとばかり考へた。此處に跳び彼處に逃れ遂に一目散に走り出した。その袈裟が風になびくので、その姿は長く奇妙に見えて、髮は風にひるがへつた。墓の中から出てきた屍體だつて、手を振り歪めた狂人のやうな顏をして大口開いて大きな苦しげな呼吸をし乍ら、跳ぶやうに走つて行く彼の怖ろしい姿程に、通行人を驚かす事は出來まい。大跳びに走つて彼は小さな街に入つた。街の端の方に墓場に連なつた小さな教會が見えてゐた。街の入口の低い腰掛に遠國いの順禮らしい姿の老人が居眠りしてゐた。その傍で二人の乞食女が惡口のありたけを盡し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て喧嘩してゐた。

父イグナシアスが家についたのはもう薄暗くなつた時分でオルガ●ステパノバの室には燈火がついてゐた。外出の儘の風裝で、はこりだらけになつて破れてる帽子も取らずに、彼は妻の傍へ行つてくずれるやうに膝まづいた。

「御母さんや、……俺を哀れんで呉れ。私は氣狂になるよ。」彼は啜り泣いた。

彼は煩悶の苦しさにテーブルの角に頭を打ちつけて、生れてから初めて泣いた者のやうに泣きくづれた。それから、妻が口きけるやうになつて自分に同情を寄せて呉れるといふ奇蹟のやうな事をば必ず生ずると自信しながら、頭を上げた。

「可愛ゆいやつ」

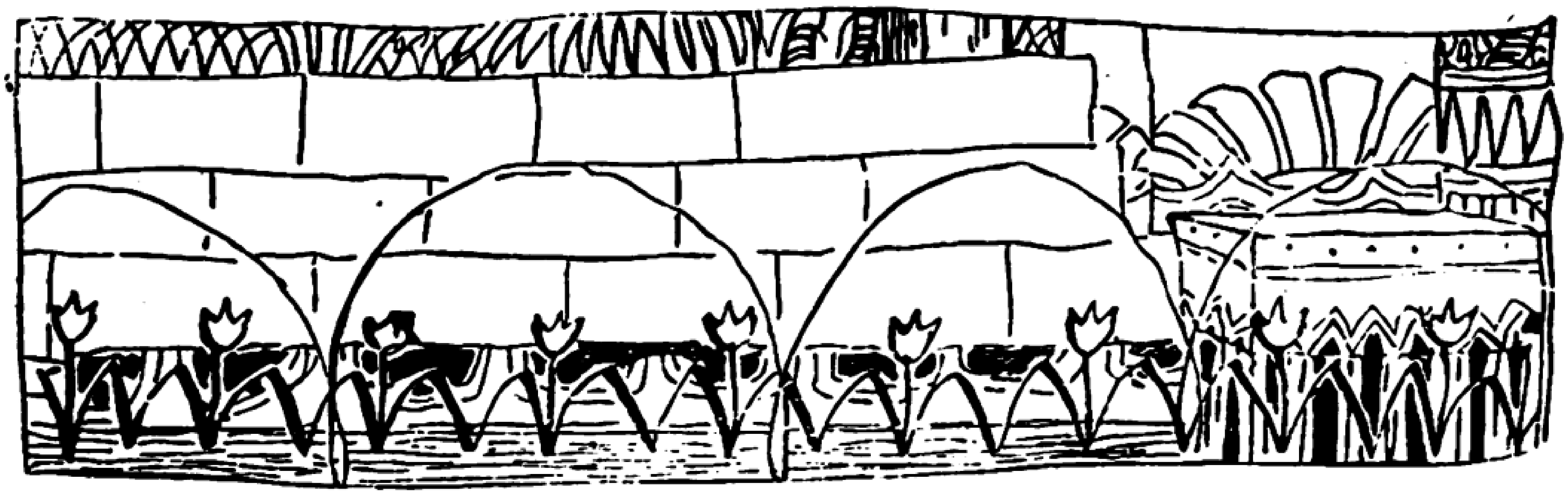
その大きな身體ごと、妻の方に引きそうた――そして例の灰色の眼の凝視に遭つたその眼の中には同情も怒りもなかつた。妻は自分を赦して呉れてるのかも知れない。けれ共その眼の中には思ひやりも怒りもなかつた。只啞のやうに沈默してるのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くして此の暗い荒れた家全體は沈默に包まれてゐた。

――完――

元、十、十六、



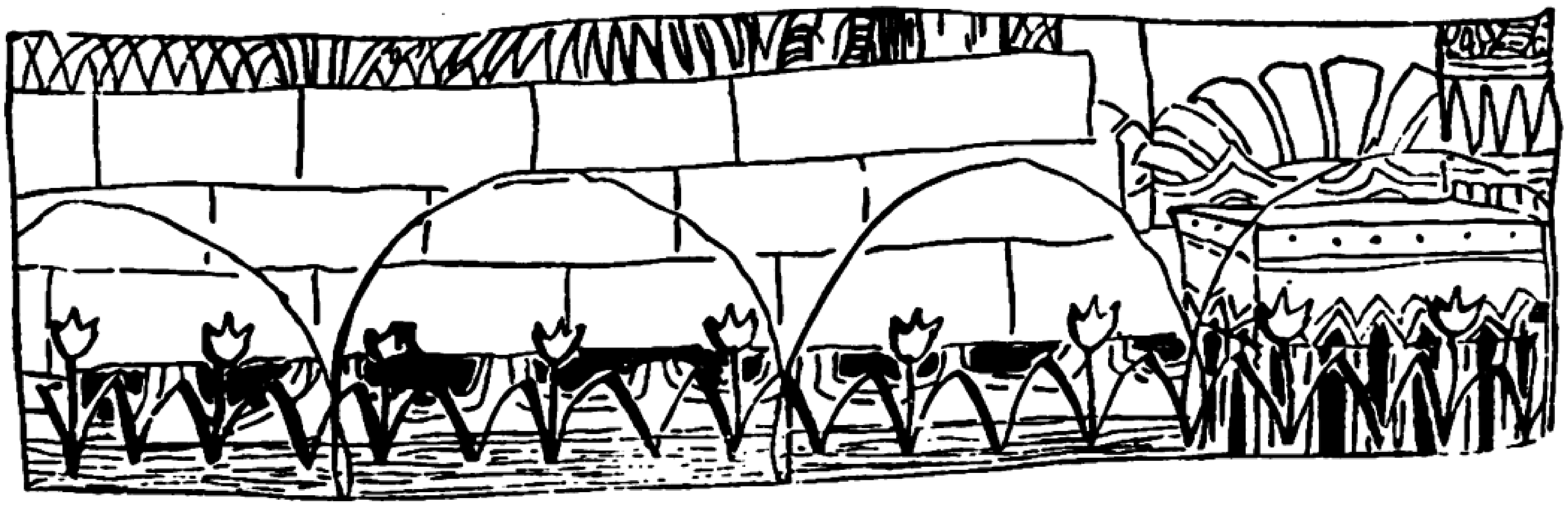
東の渚

——伊藤野枝——

東の磯の離れ岩、
その褐色の岩の背に、
今日もとまつたケエツブロウよ、
何故にお前はそのやうに
かなしい聲してお泣きやる。

お前のつれは何處へ去た
お前の寢床はどこにある——
もう日が暮れるよ　御覧、
あの——あの沖のうすもやを、
何時までお前は其處にゐる。

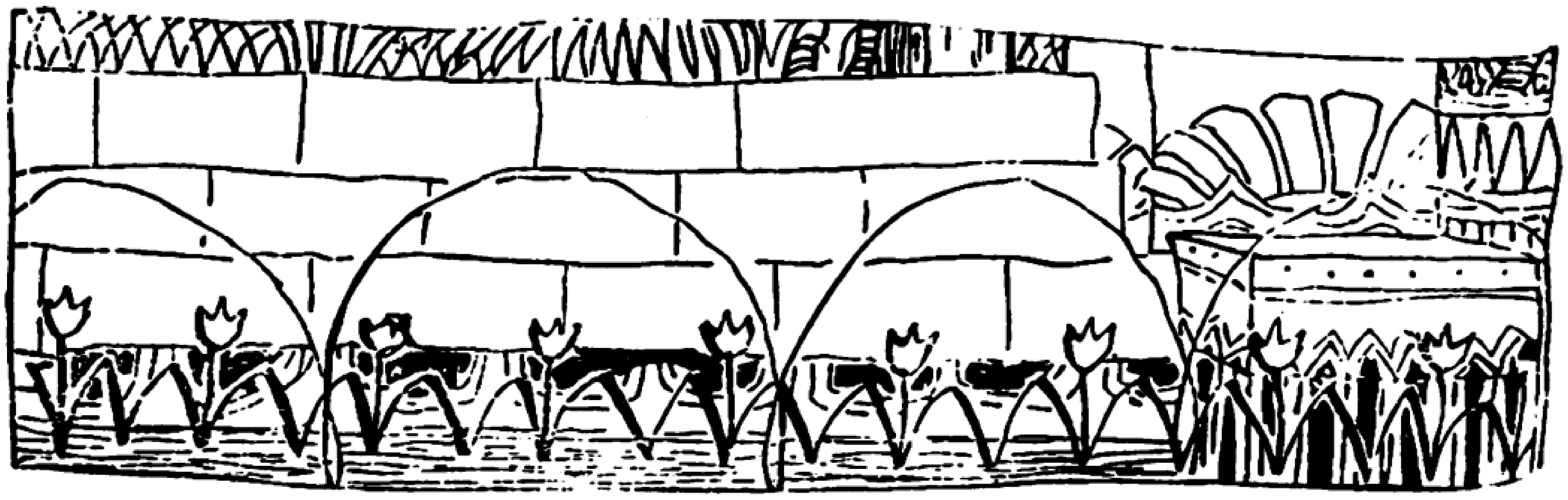
Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



岩と岩との間の瀬戸の、
あの渦をまく恐ろしい、
その海の面をケエツブロウよ、
いつまでお前はながめてる
あれ――あのたよりなげな泣き聲――
海の聲まであのやうに
はやくかへれさしかつてゐるに
何時まで其處にゐやる氣か
何がかなしいケエツブロウよ、
もう日が暮れる……あれ波が――

私の可愛いゝケエツブロウよ、
お前が去らぬで私もゆかぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



お前の心は私の心
私も矢張り泣いてゐる、
お前と一しよに此處にゐる。

ねえケエッブロウやいつその事に
死んでおしまひ！その岩の上で
お前が死ねば私も死ぬよ
どうせ死ぬならケエッブロウよ
かなしお前とあの渦卷へ――

――東の磯の渚にて、一〇、三、――

＊ケエッブロウ＝海鳥の名。（方言ならん）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氷囊

―加藤みどり―

家を持つて見ると急に一人前になつたやうな氣がして、道を歩くにも下宿住居の書生の氣持と違つた一種不可思議な一家の主人公見たやうな誇りを覺えて奈良井は神樂坂の方へと歩いて行つた。

道路の巾も廣く改通されて、今迄の狹い矢來通りの古い家々は見るも心地良げに新らしい軒を並べて居る。店々の電氣や瓦斯も今迄とは違つて明いやう。其の光が兩側から交叉する道を用ある人、散歩する人々が右往左往して、櫻散つた逝く春の夜を暖い空氣がほんのりと包むで居る。

婆やを一人雇つて煮炊の事をさせて居るが夕方の物忙しい時など奈良井は折々庭先を掃かせられたり、戶閉りをさせられたりした。淋しい山の手の家に引き移つてから未だ半月も經たないが、男の身には下宿に居た頃は別に何とも感じなかつた新らしい寂寞を、家を持つてから痛切に感ずるやうになつた。宵のうちから長火鉢で居睡りをし出す婆や一人では宵ぱりの朝寢坊の奈良井は淋しくつて仕方がない。それに今迄苦にして來た病氣の方も

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

時候と共に稍忘られて來たので、矢張心が空になつて行くと或何者かを欲して來た。

不圖奈良井は立ち止つた。多くの通行人の中から色の白い中脊の女の姿を見付けた。

『春さんじやあないですか？』

上擦つた自分の聲にハッとした時は既う相手は氣づいて其の微笑を浮べた白い細い面が自分の目先に立つて居た。

『まあ暫く。お珍しう御座いますこと。』

通行人は皆目を光らして二人を見て行く。

『暫くでした。何處へ？』

『一寸買物に參りましたのですわ。で此頃御病氣は？』

『有難う。大變いいです。貴女も病氣でしたつて？』

『ハア。少しは此の頃宜う御座います。』

『大變にお痩せなすつた。』

奈良井は殆ど一年ぶりに見た女の顏を僞々しい氣がして、強い眸を向ける事もし得なける。

『一寸承りましたが、お筆をお持になりましたつて。』

『辨天町に半月ばかり前に引き移りました。二三日すると故郷の妹が來る筈ですからちと遊びにいらつしやい。今はあの――。』

『エヽ。遊むで居りますわ。』

嘗て結婚の噂があつたが、それは立ち消えたと奈良井は心づいて居た。

奈良井は委しく自分の住所を敎へて別れた。而して道々昔戀した春子の事や、暫く逢はぬ妹の事を思つて行くうちに知らず知らず坂を降りて停留所に來て居た。

奈良井の心には妹と春子の二人の女性が今後多少自分の人生に這入つて來るやうに思つた。

春子は懶げに降る雨の脚を茫然眺めて居た。今日お琴に行かうと思つて髮だけは取りあげて見たが、重い雨傘や、高い足駄を穿いてぬかるみの道を行くのも億劫なのでどうしやうかと考へて居た。

雨は止むかと思へば又降り出す、人の心を焦らすやうな降り方を春子は腹立たしく思つて他着の着物を床の上に重ねた儘机に向つて矢張何か考へて居た。

『母樣!。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次の座敷で衣摺れの音と、鋏や物差の音とが忍やかにして居る。

「何です？お前今日はお稽古に行かないの。」

「私仕うしやうかと今考へて居るところなの。」

「行つてお出で。今に止むだらうから。」

「午後からでもいいわね。母様。」

それには返事がなく、又サヤサヤと絹の柔い音がした。

春子は二三日前の夜、奈良井に會つた事を考へて居る。

二年前、戀した男、其の男に久しぶりで逢つたと云ふことが少からず此の頃の春子の心に動搖を來たした。

歌が上手で、クリスチヤンだと云ふ妹さんと住む奈良井の新生活や家庭と云ふものを想像して見た。同時に何だかそれが口惜しい氣がして、自分も其の家庭に這入つて見たいと云ふ氣が起つた。而して冷え切つた自分のこの冷たい心を以て二人の心をも冷やしてやりたい。而して吾々三人——奈良井と其の妹と自分——は冷い心を抱いて相對して笑つて見度い。それが男に對する面當てのやうな氣もする。

春子は斯う考へて見た。別に戀することもなく一年の間暖い夢を見た奈良井と春子は又別

れるともなく其のピッタリと會つて居た心は隔れてしまつた。隔れてしまへば矢張元の他人、普通の自らを守つて居る友人となつて了つた。さうしてからも半年ばかり二人の冷い交際は續いて居た。其の間に春子の結婚問題も持ち上つた。奈良井も歸郷の度に結婚を責められた。其の度に二人は其の事を冗談のやうに話しあつたが然しお互に左樣した自分の結婚問題を昔の戀人に話す事が相手を馬鹿にしたやうな痛快を感じたのであつた。又そのくせ二人とも獨身で永久迄も居るのを欲した。矢張それも相手に對する面當のやうな氣もされた。

午後の二時頃、垂れて居た雨雲が遠く登つて青空は見えないがうつすらとした日の光が射して來た。濡れた青葉の色も心地よく、庭の隅で優しい蛙の聲もして居る。

春子は引き締つた顏をして衣服を着替へて母に一寸斷つて蒔繪の爪箱を持つて日和下駄と洋傘で出た。

神樂坂の師匠の處に行つたが既う遲かつたので師匠は外出して留守であつた。其の足で直ぐ案内をよく知つた辨天町へ行つた。別に探しもせずに直ぐ竹垣のある家を見つけた。門札に見馴れた筆つきで「奈良井」と書いてあつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

格子戸を開けると新らしい鈴の音が高く響いた。直ぐ前の障子が開いて色の少し黒い丸い大きな女の顔が現れた。

『私弓野ですが……いらつしやいまんか。』

春子は奈良井が居なければ妹でもいいと思つたので曖昧に尋ねた。

『あら貴女弓野さん？』と其の女は驚いた。

『私は奈良井の妹ですわ。まあよくこそ。兄ともお噂申して今日あたりいらつしやるか知らないなんか申して居ましたの。さあ何卒お上り下さいまし。』

『まあ島江さんでいらつしやいますか。毎度御手紙戴いて居ていつも失禮ばかりしました。』

歌の上手な女と聽いて憧れて居た其の女を今目の當り見て稍想像が崩れた。手紙は二年前には折々往復して居た。

『春さんですかお這入り。』

奈良井は暖いのに閉め切つて瀬戸の火鉢を前に机に向つて居た。

『今日お琴へ來ましたところ師匠が留守でしたものですから………

『さうですか。妹も昨夜着いたんです。少しは賑になつた。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『お廣いやうですわね。』と春子は四邊を見廻した。

二人は凝乎と火鉢を眞中に相對して居た。又降り出したのか、前の狹い庭にポツポツと雨の音がし出した。

奈良非は女を別に見やうともしなかつた。唯昔の戀人に對して居ると云ふ氣持が折々出て來るのと現在の情熱の消えた心で抑へるやうにして努めて他の事を考へやうとした。

春子は俯向いて卷煙草に火をつけて居る男の顏を額越しに見た其の目は冷に笑つて居た。自分に對して持つて居る男の心を嘲り笑つてやり度いやうな氣がした。

島江がお茶を持つて來た。西洋菓子の半分ばかり減つたのを箱ごと添へて。

『島江さん。構はないで下さいまし。それよりかお話を承り度う御座いますわ。』

春子はちらと島江の方を見て斯う云つた。

『まあ今日は二人とも始めてなんだからゆつくり話すといゝね。』と奈良非は細い目を瞬くやうにして煙の間から二人を當分に見た。

島江は物馴れた笑ひ方をして

『眞當に。弓野さんは今夜御ゆつくりなすつていゝでせう。何ぞ田舍の御馳走でも致しますわ』と忙しげに立ち去つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暫くして奈良井は春子の顔を見て

『貴女は結婚しないんですか。』と力ある聲で斯う聞いた。

『さあ什うしやうかと思つて居ますわ。』

笑ひ乍ら春子は鋭く男を見て、

『結婚なんて考へりやあつまりませんしね。然し何にも考へなければ何の事もないでせうけれど……結婚して見ませうか。』

『結婚したがいゝですよ。オールドミスは僕は厭ひだ。』

『貴君が厭ひじやあ困るわ。』

矢張笑つて居る。

『全く冗談じやない。結婚なさい。女は妻となり母となるのが一番幸福でせう。』

『型にはまつた「女」がお好きね。矢張。………』と冷笑の目をして、

『矢張左様云ふ貴君こそ型にはまつた「男」となつてお父さんお父さんと云はれる方が幸福と思召すんでせう。早くさうした貴君を見度いわ。』

『馬鹿な！僕のやうな身體の弱いものは………』と淋し相な顔を横に向けてしまつた。

洋燈が茶の間につけられて島江の手料理と卷鮨とが餉臺（チヤブダイ）に並べられた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三人が一つ餉臺で食べると云ふことが不思議のやうな氣がした。

食事を濟ますと奈良井は湯に出て行つた。二人の女は長火鉢ごしに相對して小聲で語つて居る。

島江は折々聖書の詞が習慣となつて居るので口に出た。而して自分が今迄さんざん辛い目をして來て未だ斯うして平和な心を抱いて居られるのも一に神のお惠みだと云つた。弟妹多くある中で唯眞の兄妹は兄と自分きりである。だから今度兄が病氣だと聽いて自分の勤めて居た病院から暇を貰つて直ぐ出て來たなどと語つた。

島江は今年二十六歳である。十八の齡に初婚してから二十三の齡迄に三度人妻となり二人の母となつた。然し不幸は何處迄も島江を苦しめ、遂に精神的平安の地を苦悶の結果求める事が出來て、クリスチヤンとなつた、而して此の二三年間に島江は立派に看護婦として田舍の病院に獨立して居た。

奈良井は歸つて來て見ると二人はすつかり舊友のやうに打ち解けて居た。自分が二人の脇に坐つても二人の話は切れないので何だか退け者にされたやうな腹立たしさを覺えて座敷に這入つて了つた。

その心を春子はよく解して居た。而して心に快感を覺えた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奈良井は折々訪ねて來る春子を時とすると心待ちに待つ事があつた。然し其の本人が來て見ると淡い失望を覺えた。何の爲めに春子が來るのか解する事が出來なかつたが、來ては島江と飽かず語つて自分には全く心を止めずに歸つて行つて了ふ。それがいかにも飽き足らなく思ふ。二人親しげに語つて居るのを見ると自分の妹を他人に取られたやうな口惜しさを覺え、又自分の戀人が自分を忘れて居るやうな恨めしさも交つて奈良井は孤獨を感じ乍ら毎日焦々して居た。

一思ひに二人の間を裂いて了うかとも思つて見るが、春子が來なくなるのも詰らない氣がする。

島江は何かと優しく兄に事へた。婆やも解雇して勝手の事や兄から渡される小使錢を上手にくりまわして行つた。

衣更への時候も過ぎて世は何となく夏らしくなつた。白つぽい色が群集の中にチラチラ見えるやうになつて、淡い色のネルの着物などが目に心地よく映り出した。裝飾(かざし)のリボンと銹色が消えて涼しい色に移つて行つた。洋傘の色彩も日の光と何となく調和して人の心も夏待つらしい氣持になつて行く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奈良井は種々の精神上の煩悶や又馴れない新聞社の勤務が身にこたえて居たのと、昨夜友人の處で酒を飲み過ぎたのとで持病の心臓が急に悪くなつた。今朝起きるは起きて見たが朝飯もほんの一膳ばかりしてけたるい身體を籐の寝椅子の上に横わつたが矢張苦しい。心臓の皷動が烈しくなつて來た。それと心づくと奈良井の顔は不安と恐怖と苦悶に眞蒼になつた。

島江は驚いて床をとつて兄を臥かせて、其の脈を取つて見ると驚いた。

『兄さん大變だわ。捨てて置かれるものですか。私大石さんのところへ上つて直ぐ代診でもいいから來て戴くわ。』と島江は直ぐ近くの懇意の醫者の處へ馳けて行つた。

其の日から奈良井はどつと床に就いてしまつた。

熱の爲め折々苦悶しては胸の氷嚢を掻き退けやうとする。乾ききつた唇は折々慄えて水を求める。二三日の中に痩せた身體や顔が一層傷々しげに尖がつてしまつた。

それでも夜の目も眠らずに看病する物馴れた島江の力で少しづつ快方に向つた。

『兄さん。それでも今日は大變快い風ね。』と今安らかな眠りからさめたやうに目をパッチリと開けた近眼鏡を取つた兄の顔を島江は凝乎と見た。

『ああ！今度は助からないと思つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『眞當ね。一時は全く。』
奈良井は不圖春子の事を思ひ浮べた。
『春さんは一度ばかり來たかゝ。』
『いいえ。どうなすつたんでせう。』
『一度も。』
『薄情だわね。』
暫く二人の心には春子の事があつた。
夕暮の物騒しい外の音を奈良井は寂しい心で凝乎と聽いて居た。するうちに引き入れられるやうに深い睡眠に落ちて了つた。
パッと目を開くと軟いランプの光が目に映つた。同時に妹かと思つた女の面影が幻のやうに浮き出た。
『あら御目醒め？』
『春さんですか。』
『私久しく御無沙汰しましたわ。大變な御病氣でしたつてね。私も例の神經衰弱で少し田

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舍の方へ氣晴らしに行つて居たものですから少しも知りませんでしたの。」

奈良井は目で頷いて再び茫然と眠りに陷つた。

春子は夕飯の仕度で忙しい島江の代りに奈良井の枕許で胸の氷を取り替へたり、額ににぢむ玉のやうな汗をガーゼで拭つて居た。斯うして昔の戀人の病氣を看りして居ると云ひ知れぬ懐しさが湧いて來る。何だか斯うしんみりとした心になつて心から親切にして見度くなつた。既う二十三の女の寂しい心には何となくか弱い男が戀しくなつた。

今氷を替へやうと奈良井の胸を開くと奈良井は物に襲はれたやうに急に眼を開いた。

春子は男が永久に眠つて居て呉れればいい。而して斯うした自分の暖い優しい心を遮げられる事なくつくして見度いと思つたが駄目であつた。春子は驚いて手を引いた。

此の時島江が這入つて來た。

『今ね。氷を替へてあげやうと思ひましたの。』

『どうも濟みませんのね。お使ひ申して。兄さん今日は大變弓野さんに御世話かけたのよ。私が醫者へ行つて來る間も御留守居して戴き、今も斯うして兄さんの看病迄御願ひして。』

奈良井の心には暖い血がパッと湧き上つた。期せずして春子の眼と奈良井の眼とはパッ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たりと會つた。戀の復活！と云つたやうな情熱が電光のやうに二人の心と心とに流れた――。然し直ぐお互に「自己を守る」心に立ち返つた。

『どうも有難う。』

『どう致しまして、行き屆きませんで。』

通り一ぺんの挨拶と挨拶は二人の口と口とに交はされた。

再び冷い眸と眸は二人の間を暖めなかつた。

八月中旬

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社詠草

山田澄子

少女子の聞きわけもなき涙こそいとうれしけれいとたふとけれ

いと安き宿世といひて野の果てに低き草のみつめるわれかな

冷やかに名を聞くだにもわびしきを憎しとまでに導かれける

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まどはしの苦しき色は捨てたれど白き心のう
らさむきかな

水薬と心のおりと打ち捨てゝさやかになれば
初秋に入る

あなおろか萩の散るにも涙しておのが黒髪梳
くを怠る

日まはりはめでたしわれに新らしき世の開け
たる朝のながめに

わが胸は花かれはてゝ思ひなしあきらめこそ
はうつろなりけれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岸　照子

まよひ出でしばしいこへる野の石に忘られぬ
み名かくもわりなし

ふと空に月を仰ぎてふと君の戀しくなりぬ出
でゝ逢はまし

いみじかる少女心は涙もて示す外なし祕むる
ならねど

はかなしやありのすさびに誓ひたるそらごと
をさへなほたのむわれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兒島てるを

淋しくも君ひとりゆく旅姿月見草咲く秋の夕に

身の限り君を思ひてわれ死なん月のかなしく虫のなく里に

青井禎子

わが暗き心は空を仰ぎ見ぬ籠の目白をはなちやる朝

くだかれて打ち捨てられしダアリアかみだれて泣けるわれの心か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おきみ ―藤岡一枝―

讀みかけの、約翰傳五章の終りへ、薄淡紅色のリボンへ菊を描いて栞にしたのを挾むと、何かかう後から追馳られるやうな、あはたゞしい氣に迫られて、お君はツイと立上つて障子を開けた。

まだ暮れ切らない四邊は、凡ての物が薄黑い夕暮れの色に包まれたまゝ、ないつと押靜まつてみえた。

隣家の垣根に近い椿に絡んでゐる烏瓜が、細い、柔らかい、絹糸でゞも造らへたやうな、白い夢みるやうな花を、稍涼しい風に幾つか動かせてゐるのを、意味もなく凝乎と見詰めてゐると、何時になく動悸が高く打つのが明瞭と分る――それかと云つて何の事もないのに、只無暗とドキ〳〵するやうな、居ても立つても居られないやうに思はれて、譯もなく庭下駄を突かけて下へ降りた。

此の夕べは、何だか凡ての物がお君には靑く光つてみえた――空の色も、櫻の木も桃の木も、而して四邊の凡てが只蒼くみえると、もうお君は息苦しくなつて、ぐら〳〵と目が

眩つた。危く倒れさうになつたのを漸つと壁板に倚りかゝつて、袂で貌を押へた儘、目眩が少し癒る迄ぢいつとしてゐた。動悸は無暗と高くなる、軈てソロ／＼足を運んで、ソッと椽側へ腰を下した。一體奈何したのだか、奈何云ふ譯だか分らない、只胸騷ぎがして、息苦しくなつて――もしや母さんからの心臓病――這麼事迄考へられて、お君は不安の念に堪ないやうな目付をした儘、何を見るでもなく茫乎してゐた。紫陽花の葉の茂つた蔭から草雲雀が一トしきり一トしきり鳴きたてゝゐた。

ふいと此の時隣の部屋で啜り泣く聲がしたので立上つた、而して立つたまゝ開けた障子に體半分隱すやうにして中を見た。何處も此處も夕暮の色に浸つた座敷は、只一體に黑い影許り多く作られてゐた。片手に雜誌らしいものを卷いて持つてた妹は、急に居座を直して、愛想氣もない貌をして見下してゐる姉に對して、さも今迄何か自分が惡い事でもしてゐたやうにドギマギした。二タ皮瞼の大きな目が濡んで、何度もこすつたらしく赤くなつて、一皮のやうに見える。

「奈何したの」お君は味もなく云つて見下した。

「いゝえ」と愚かしいお美代は、着物の前を合せ乍ら、恥しさうに強いて笑つた。

「だつて泣いてたぢやないか、奈何かしたの」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「いゝえ」

「可笑しな人、泣いてゝ奈何もしないつて事はないぢやないか」と惱つたやうな調子で云つて、お美代の貌から目を放さなかつた。

「たゞ、只母さんの事を思つた許りなの」お美代は素直に云つて、

「先刻父さんが椽側に出て、暑い〳〵と云つて襯衣をお脱ぎになつたの、而しちやハツ〳〵と云つて被入るんですもの、私奈何していゝか分らなかつたから何にもしないで見てたんです、而したら母さんが被入つたらいゝと急に思つて、涙が出て來たの」とお君に氣兼をするやうな目をしい〳〵云つた。此の娘に、這麼考へが何日ついたのだらう、と寧ろ不思議に思はれる程、お君は腹立しかつた、で久濶くの間冷たい、寄りつけないやうな貌をしてゐたが、

「だつて小母さんが被入つたんでせう」

「いゝえ、小母さんは被在らなかつたの、お湯に被入つたから」と機嫌を取るやうな笑ひ貌をしてみせるので、何だかその可憐しい態度をみては、思ひ切つた皮肉も云ひ出せなくなつて、

「さう、それで泣いてたの」と優しく笑つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ぢやあもうそんな事で泣くのはおよし、さ、私のお部屋にお出でな、いゝものを上てよ」と先に立つて机の前に座つたけれども、矢張り目眩はなほらないやうな氣がした。可哀想な妹、自分とは二つしかちがはない乍ら、人並よりは七つも八つも智惠の劣つてゐる妹――而して母が死くなつてからは、自分が憐んでやらなければならない筈の妹だ、と心の内に念を押すやうに思ひ乍らも、目の邊りの勝れて美しい縹緻を持つたお美代の貌を見ると、憐れ、とよりは、只自分の顏と競べて、譯もない腹立しさを覺える。人が面白半分に、赤坂の萬龍に似てゐると揶揄つたのを悦んで、「私は姉さんになんか些少も似てやしないのよ」と他の人に云ふのさへ憎らしく思つた。這麽事を思つて、妹の十九にしては華派な、子供らしいつくりをみてゐる内に、何とも云へない厭な心持になつて、机の上突伏して了つた。

夜になつても頭痛がして、ともすると凡ての感覺が失はれて了ひさうな氣持は全癒らなかつた。

父は假り初めの風邪がこぢれて、此處四五日は枕についた限りでゐた、お君はその裾の邊りに座つて水飴だの、藥壜だの、唆壷だのと置かれてある枕元や、時々寢返りを打つて

は、大きく息をする父の目に立つて瘦せた顏等をみてゐた。奈何云ふものか甚く感じ易くなつたお君には、平常は年より十も若くみえた父が、骨も目立つて、皺も多くなり、色艶の惡い父の顏は、いた〳〵しい迄にお君の胸を刺した。

「如何もおそなはりました、買物を傳手にしたもんでね」と云譯らしく云つて、小母は入つて來た。自分達は只小母さんと呼んだ――その人は、小造な、纖細立な、綺麗な人で、お君には一倍氣兼をして、逆らはないやうにしてゐるのを、知らないでもないお君は、此の小母と呼ぶ人と、而して父と――只横を向いてゐればいゝと思つた。その頃から一倍感じ易く、母を可哀想だと染々思ふやうになつた。

隣りの四疊半との境を、唐紙一枚丈引いて、丁度父の顏に灯火の來ないやうにして、その四疊半には瓦斯が部屋一ぱいに、その涼しいやうな明るさを投げてゐる下で、妹のお美代は小母さんに强請んで、千代や、赤や桃色の切れを持つては、あねさまを造らへて貰つて居た。お母はお美代の云ふなりに、お小姓のやうや頭だの、島田、結綿、丸髷、と造らへては赤い巾をかけたり、着物を着せたりして、順々に、昨夜からのを合せて唐紙の傍に並べてたてかけた。お君は何をしても詰らない、と云つたやうな顏をして、それをみたり、父の方をみたりしてゐた。小母は苦も無ささうに、紙を縮らしては髮の毛にしてゐた。お

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美代はお美代で、何時もの通り小母の傍に座つてそれを見てゐたが、聽て小さい箱を持つて來て、座敷の隅に並べ出した、その中には雜誌の口繪やらコマ繪やら、氣に入つたのは丁寧に切り拔いて入つてゐるし、藝妓の葉書や、芝居の舞臺面のも入つてゐた。藝妓のは萬龍、照葉、靜江、濱勇などのいろ／＼な風をしたのが大切にしてあつた。お美代は丁寧に並べては、

「どれが一番よくつて？」と聞くのが常だつた。お了ひにはお君も面倒になつて、

「いやさ、又かい、ぢやあ此度はこれ」と手當り次第に取つてはソッとお美代に打つけたりした。

「小母さんは？」お美代は五月蠅く聞いた。

「私ですか、私は貴女に似てる此の萬龍がようござんすね」などゝ云ふので、お美代は嬉しさうに笑つてゐた。氣樂な人、罪のない人、お洒落な人、着物の好きな人こんな事を思つて、お君は器用にあねさまを造らへて行く小母を見てゐたら、小母は不意と顏を上げて、

「まあお君さんのお顏の青い事、眞青ですよ。私は先刻から乾度奈何かなさつたんだらうと思つてましたの、ねえ、お寢みなさいまし、私が貴女の床を延べて來ますから」と、小母は立たうともしないお君を無理に引張つて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「又其様に無理をなさるとお父さんのやうになると困りますよ」と笑談らしく云つて、無理に帯を解いたり、後ろから寢衣を着せたりした。床に入ると夜具を深く被つてみたが奈何も息苦しく思はれるので、起上つて、枕に顔を埋めてゐた。小母と妹の笑聲が一つになつて聞えて來る、下らない人、と思はずお君は蔑視んだやうな笑を洩らして的もなくチリ〳〵した。お美代の馬鹿を思ひ切ッて云つてやりたいやうな、何も彼も打捨つて了ひたいやうな、無暗と疳が高ぶつて、自分で自分が制し切れないやうな氣がして、お君は譯もなくホロ〳〵涙を零してゐた。幾度か寢返りを打つてみても、暖たかくなつた括り枕を引くり返してみても、容易に眠れさうにもなかつた、ふつと額に手を當てると、燃るやうにあつかつた。

お君は用もないのに、其折々の自分の感じを友達に書いてやつて、其の返事を貰ふのを何より此の頃は樂しみにするやうになつた。寢てゐる間に、腹ちがひの姉からと、耶蘇教徒の友達からと二本來た。姉は北海道にゐて、腹違ひとは思はれない程の親しさがあつた。

貴女が病氣だつて事を聞いて私は甚麼に驚いたでせう、醫者は何て云ひました？脳衰弱

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でずつて、不可ないわ、大切にして下さいよ、而して余り本に凝らないで、もつと活潑に氣を輕くするのよ、運動をしてね、くよ〳〵したり貴女のやうにさうヂレ〳〵しちや困るわ、而して私は貴女に結婚をお進めするのよ、貴女も後で分りますけど、結婚して幸福でゐると、そんなに惱る事はなくなつてよ、疳癪などは起らないものよ、穩かになれますよ、君ちやん、貴女は惱りぼくはなかつたでせうか、勝手な事を云つて、氣に觸つたらごめんなさい、――

此處迄讀んだら我知らず姉さんから侮辱されたやうに感じて赧くなつた。姉さんはもう自分の心が分らない人だ、姉さんのやうに何も彼も結婚で終りをつけて了はふとするやうな、そんな――と思つて獨りで眞氣になつた、而した考への後から些少と御散歩にお出かけになりましたら私の家へでもお寄り下さい、貴女のやうなお年頃の方が餘り御勉强が過るんぢやないんですか、と云つて輕く笑つた醫者の白いを見た時、我知らず媚びやうに自分も笑つて首肯いた、それを思つて獨りで赤くなつた。而してその羽織の絹の袖の冷たさが、何日迄も〳〵お君の胸を震はせた。

床を並べて寢るお美代が、如何にもよく寢入つてるのを見ると、何となく腹立しい氣に驅られて、凝乎と見詰めてゐる事など度々あつた。斯うしてムラのある感情を、屹度お美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

代には現してゐるのだけれども、何とも感じないのか、お美代は人一倍氣にして、お君の枕元を離れなかつた。何の不平だか、何の淋しさだか、譯の分らない思ひに惱されて、お君は床の中に十日許りゐた。九月に入つても暑さはまだ仲々烈しかつた。斯うした暑い晩に、直ぐ憐家の新内の師匠の內で、喧ましく、彈いたり笑つたりする事は、何より聞くのが厭だつた。誰かまだ習ひ初めの下手なのに、かさねなどをしてゐる、それが又耳立つてお君の神經をいためた。

「思はず初めてみる貌にハッと吃驚りまだ外に……

とかさねが女衒から腹立紛れに鏡をさしつけられて、驚く處を幾度か唄つてゐる。自分もまあかさねのやうだつたら奈何だらう、這麼事迄考へて、布團の下に入れてある懷中鏡を出しちやよくみい〳〵した。而して鏡から目を放した時、妹のお美代をみると何とも云へない侘びしい心に返つた。さうしちや信者の友達から來た手紙の文句を思つた。貴女は何をさう仰在るの、私はようく貴女のお心を察して上るのよ、決して失望などしちや不可ません、私は這麼に病氣だけど決して失望はしないのよ、泣くのはよして頂だい、お君さん、神樣は泪を拭いて下さるでせう、お君さん何卒約翰傳十四章一節を讀んで頂だい、而して加拉太書五章のお終ひとね、と云ふ言葉を思ひ出しては聖書をあけてみる事もあつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

「お君さん、如何です、風月のですよ」と云ひ乍ら母がシュウクリームを鉢に入れたのを持つて入つて來て、

「お隣家は賑やかですね、今夜お淡ひなんですよ、先刻大變な明鳥をやつてましたよ」と云つて莞爾した。薄すり化粧つた貌に、意氣な浴衣が又無く似合つて、今夜程小母を奇麗に思つた事はなかつた。二人は無言つて、薄明くした灯火の元に、手持無沙汰に相對した。隣家の笑聲は手にとるやうに聞えて來る。

「私明日邊り起きやうと思ひますの、別に寢る程の病氣でもないんですもの、でも到頭十日許り寢て了ひましたから」と久濶くしてお君が云つた。

「でも無理をなさると不可ませんよ」と小母は逆はずに笑つてゐた。

「えゝ」と首肯くと、何處か急に此の小母が賴しいやうな、力になつて貰ひたいやうな、難有いやうな思ひがゴッチャになつて、はぐつてある掛布團へ突伏すと、泪が止度なく頰に傳つた。

快い方に向いてはゐても、年が年丈に父の方は兎角捗々しく行かなかつた。お君は少し

瘦せた體にあらい絞りの浴衣を弱々しく着て、庭に立つてゐた。風も無いのに百日紅の花がもう褪せてホロ〳〵と散つて來るのを、足で寄せたり散らしたりしてゐた。

「あら猫が」とお美代の大きな聲に驚いて、その方をみると、大きな烏猫が一散に逃げ出して行つた。その後ろを睨むだまゝお美代は金魚を入れたギヤマンを持つてゐた。

「奪られたの」

「えゝ一番いゝのが」とお美代は泪含んで首肯いた。

「隨分大きな猫でしたよ。私はかうして俯向いてたもんですから些少も氣がつかなかつたら、お美代さんの聲に吃驚りしてみたんですよ、何でも此の位ありましたねえ」と今迄下着を縫つてゐた手をやめて、椽側迄出て來て手で大きさをこしらへてみせた。

「でも私の聲で吃驚りして咬へたのを落して行つ了つたの」とお美代は手を突込で、すくふと、お君の目の前にさしつけた、キラ〳〵と秋らしい濃い日光の元に、妹の指の間からポタ〳〵たれる滴がかはくと、三つ尾の大きな緋絞りの金魚は、白いお美代の手にだらしなく横はつてゐた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

汗ばむ頬

——岡本かの——

後れ毛のすこし散るほど風よ吹け薄く汗ばむ
頬の冷えぬまで。

ひそやかに座をすべり來ぬ恥かしき女の醉ひ
をとく追へ夜の風。

たそがれの風に吹かれて來し人のうすら冷た
き頬をくちづけぬ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋立ちぬ惡どきまでに黑髮の濃き友をやゝうとみそめけり。

いま一度よびても見んかほそぼそと肩を落してかへる後姿（うしろで）。

大人びて薄く髭など目立ち來し男かはゆし初秋の風。

秋のかぜ飽かずあせらず靜なる情とふたりなりにけるころ。

この夜ごろ言葉ずくなに寄り添ひてあるがうれしやこほろぎの聲。

[redacted]

秋の風まろき乳房も黒髮もためらはで吹く心憎さよ。

やはらかく拭ふ男のかたはらにあるに甘ゆる涙なるかも。

やや饐えし果物の香の親しさよ男なき夜の淋しき心に。

眼を閉ぢて我が拍つ戀の手拍子にただ舞ひねかし稚き男。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

メールストロムの渦 ――ボオ――

天命と等しく自然に於ける神の道は人間のそれと異り、且我等が工夫する模型はいかなる點を以てしてもかのデモクリタスの井戸よりも更に深き、神の採るべからざる製作品の廣大と玄妙とには比すべくもあらず。――ジョセフ　グランヴィル。

今、私達は一番高い岩山の頂上に登り詰めた。

暫くの間、老人は話も出來ない程疲れたやうだつたが、遂と口を開いた。

「近頃迄私は末息子のやうにこの道を平氣で御案内いたすことが出來ましたが、三年ばかり前、まだ人間の出會したことのないやうな――またたとへあつたにしろ生き殘つてそれを話したものはないやうな出來事に出逢つて、其時堪へ忍んだ僅六時間の何とも知れない恐ろしさに私の身體も魂もズタ〳〵に破れて仕舞ひました。御前樣方は私をほんに老耄めと御思ひだらうけれど――實のところ私はさう年寄では厶いません。眞黒だつたこの髮が白くなり、手足が利かなくなり、神經が弛んで一寸したことにも震ひ、物の影

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にも驚くやうにこんなに變り果てたのを僅一日足らずのこと。もう御氣付だらうがこの小さな崖から見下すにも私は眩暈がしてゐるのです。」

彼は自分の身體の重い部分が絶壁から吊下げられたやうに心配氣もなく「小懸崖」の端に身を投げて休むと同時に、極めて滑かなその緣から轉び落ちやうとするのを只辛じて自分の肘に支へた。

此の所謂「小懸崖」は私達の脚下、巖の世界から黒色に輝く岩の嶮しい絶壁として、大凡一千五六百フィート、何の遮るものもなく高く聳り立つてゐる。誰だつてその岩端近く六ヤードの内に私を誘ひ込むことは出來ない。實際私は連れのこの危險な位置を見て、地上に長々と打倒れ、あたりの灌木にしがみついて、仰いで大空をぢつと見ることさへ出來ないばかりか、この山の基礎が狂暴な風のためもしや搖ぎ出したらといふやうな杞憂を頭から取り除かうと空しく心に戰つたほどひどく興奮させられてゐた。再び立ち上つて、遠方を見やるだけ十分の勇氣を得るには長い時がかゝつた。

「御前樣は怖いといふやうな考に打敗けてはいけません。私が御前樣を此處に御連れ申たといふのは今御話した事件の光景が一番よく御解りになるやうに、又一つには丁度眼下に現場を控へて殘らず御話いたしたいが爲めなのでムいます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は更に彼物獨特の態度で話し續けた。

「私達は今、諸威の海岸の近くの、北緯六十八度にあたるノルドランドと呼ぶ大きな縣の内のロフオデンと呼ばれる淋しい郡にゐるのです。私達が頂上に座つてゐる此の山はヘルセッゲンといふ山で俗にクラウディと云ひます。さあ、も少し延び上つて御覧なさい。――もし眩暈がなさるならこの草につかまつて、――さうそしてすぐ下のところ、靄の帯を越して海を御覧なさい。」

私はめくるめきながらも言はれるまゝにすること、渺茫として擴がる大洋を視た。其水の色はヌビヤの地理學者の「闇の海（マレ・テネブラルム）」の記事をすぐに思ひ起させた程インクのやうに黒かつた。どんな人間の想像力もこれ以上いたましい荒れ果てた光景は受入れられまい。左右見渡す限り、恐ろしい程黒い懸崖のラインは人間世界をかぎる疊壁のやうにずつと横はり、その暗澹たる性質は寧ろ打ち寄せる怒濤と永久に咆え、永久に叫ぶ白い、物凄い波頭とによつて更に烈しく强められてゐる。丁度私共が絶頂に坐つてゐる岬と相對して、沖の方五六哩に寒さうな裸小島（はだかこじま）が見える。いや見えるといふよりも島を取まく大浪の廣野を通して、僅に其位置だけを識別し得るといふ方が適當であらう。更に大凡二哩も陸に近く、なほ小さな厭はしい迄巖だらけの恐ろしい不毛の島がある。その周圍をばら〳〵に連なる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一群の黒い岩が取巻いてゐる。

ずつと遠方の島と海岸との間にあたる大洋の面には何かは知らず眞に世の常ならぬ有様を示してゐた。丁度其時、帆を巻き上げて走る沖の二橋船(ブリツク)が絶えず船體を水面下へ沒し去るほどの強風が海から陸へと吹きつけてゐたのに、なほこゝにはかの規則正しい大波の起伏はなくて、あらゆる方向に——風に從ひ、風に逆ひ、短く、早く、水が突き進むばかり。只僅の例外とも見るべきは岩の近くに立つ泡だけであつた。

老人は又話し出した。

「あの遠いところの島を諾威人はウルグと言つて居ります。中途のはモスコーで、それから一哩北の方のはアンバアレン。あちらのはイスレエゼン、ホトホルム、ケイルドヘルム、スアルエン、ブツクホルムで、なほ向ふのモスコーとウルグの間にオツテルホルム、フリイメン、サンドフレエゼン、ストツクホルムが厶います。これは皆この地の本名には相違ありませんが、一體何故(なぜ)こんな島に一々名をつける必要があるのかどうも考へても分りません。ほら何か聞えやしませんか。御分りでせう、海の様子が變つて來やしませんか。」

私達はロフォデンの内地からヘルセツゲンの項上へと登つてそこに約十分あまりも過

した。私達はこゝへ來る迄まだ一目も海といふものを見なかつたのだが、今私達の眼の前には限りもない大海が開展された。老人の言つた通り、私は聲高い、しかもアメリカの平野で水牛の大きな一群が呻くやうに次第に募つて行く物音を聽いた。と同時に私は脚下の大洋の航海者達がチョッピングと名付けるゐる波が忽ち東に向ふ一の潮流と急變しつゝあるのに氣付いた。潮流は見る間に異常な速度をとつて、無暗に、性急になり、瞬間毎にその劇しさは加はつた。五分以内に海面かけて、ウルグの島まで統御しがたいやうな狂暴に陷つた。が、中にもモスコオと其海岸との間は猛烈を盡してゐた。一千の澪の痕、縱横に入り亂れたこの茫漠の水面は見る間に物狂はしい動亂の狀を現した——喘ぎつゝ、沸き返りつゝ、叱聲を放ちつゝ、巨大な無數の渦となつて旋轉して行く——水が直下の際の外決して見ないあの早さをもつて一切は東へ、東へと驀進しつゝ旋轉して行く。

數分の間に光景は一變した。表面一體は前よりも多少滑かになり、渦は一つ一つ消えると共に、一方では今迄誰れにも見えなかつた處に泡の異樣な縞がはつきり顯れて來た。遂にこの縞は遙か遠く迄廣がり、結合して、さきに消えた渦の回轉的運動をおのづからにとつて更に大きな他の何ものかを新に形成するやうに思はれた。が、見る見るそれは直徑一

哩あまりのはつきりとした環に纒まつた。渦の周邊は水花の輝く幅廣の帶で表はされてゐた。併し何一つとしてこの恐る可き漏斗の口中に辷り込んだものはない。漏斗の内側は眼のとゞく限り、水平面に對し四十五度の角度をもつて傾く、滑に光る暗黑の水壁になつてゐる。水壁は絶えず目くるめく程速に、くる／＼と廻轉し、又はかのナイヤガラの大瀑布が苦悶の時天に呼ばはるよりもなほ恐ろしい半ば叫び、半ば吼えるやうな大聲を風に向つて立てゝゐる。

山は底から震へた。岩も搖いた。私はひつたりと地面にうつぶしに倒れて、神經の興奮のあまりあるかなしの草にしがみついた。

とうと私は老人にかう言つた。

「これが人のいふメールストロオムの大渦に相違ない。」

「ひよつとするとさうも言ひます。けれど私共はあの中途のモスコオ島の名をつけてモスコオストロムと呼びます。」と彼は答へた。

この渦に關する一般の記錄は實際を見たものには何の足しにもならない。中で一番詳細なヨナス、ラムスのものですらその光景の偉大に就いても、恐怖についても、又目擊者の心を惑亂させるやうな異常のものに對してぼつとなるやうな感じについても全く想像を起

させない。著者は全體何處から、又何時頃これを眺めたのかは知らないが、只このヘルセツゲンの頂上から暴風の最中に見下したのでないこと丈は確である。併し彼の記述の中にはよし其光景の印象を傳への上の効果は極めて薄弱なものであらうとも引用するに足るものがある。

彼はかう記した。

「ロフオデンとモスコオの中間は水深、三十六乃至四十尋なり。然れどもウルグ方面にあつては其深さを減じ、船舶は暗礁に乘りあぐることなくして通過すること難し。しかも天候最も平穩の際にして然るなり。滿潮の時、海水は非常の速力をもつてロフオデンとモスコオの中間を疾走す。しかも猛烈なる干潮の吼聲は最も恐ろしく、最も大なる瀑布の聲もこの比にあらず。其響は五六里の外に及ぶ。渦は廣く、且深く、船舶其吸引力の中に入り來らんか必ず水底深く運び去られ、岩石にあたつて粉碎せらる。而して水勢和らぐに至つて破片は再び水面に投げ出さるゝなり。然れども斯の如きの凪は只天候平穩なる日、干潮滿潮の交り目に於て來るのみ、しかも僅に十五分を出でずして其動亂は漸次舊に復す。潮流の最も烈しき時、しかも暴風の來りて、其狂暴を増さしめたる時、一諾威里の內に入るも旣に危し。通過の際警戒を怠りしため渦中に陷りし大船小船少なか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らず。又屡々鯨の來りて卷き込まるゝことあり。其時鯨は自から逃れんとして空しき努力に吠え叫ぶ聲は筆紙の及ぶ處にあらざるなり。曾て一匹の熊あり、ロフオデンよりモスコオへ泳ぎ渡らむとして、潮流にとらへられしがその吼聲陸に達して恐ろしかりしとぞ。樅、松の幹其内に吸込まるゝや、折れつ、裂れつ、サヽラの如くなりて再び浮び出づ。これ疑もなく是等の木片が右往左往に回轉せる水底のいかに嵯峨たる岩石より成れるかを證明するものなり。この潮流は海水のさしひきによつて調節せらる。一進、一退六時間を費すを常とす。千六百四十五年、セクサゲジマ日曜日の早朝なりき。潮流ことの外荒れ狂ひ、爲めに沿岸の家屋より石材まろび落ちし程なりしとぞ。」

この水深に關する記事だが、渦の極近くで測ることが出來やうとは私にはどうも考へられない。四十尋と云ふのは只モスコオかロフオデンかどちらかの岸に近い海峽の一部分であらう。メールストロムの中心はもつと／＼測ることも出來ない程深いに相違ない。が、しかもこの事實は別段證明を要しない。只ヘルセッゲンの絶頂から渦の深淵を横に見下しさへすればそれで成程と肯かれるのである。

私が今このヘルセッゲンの頂から吼え狂ふフレゲトンを見下しながら、いかにも信用し難い事件として鯨と熊の話を記した質直なヨナス、ラムスの單純な心をほゝゑますには

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐられなかつたといふのは實際私の見た處では世界中で一番大きな軍艦でも一度(ひとたび)この恐ろしい引力の勢力圏内にはいつたが最後、丁度大風の中の一ひらの羽毛のやうに少しの抵抗もなく見る間に一つ殘らず消え失せねばならぬのは分りきつたことだからである。

この現象に關する記述は色々あるやうだが、今私の記憶してゐる或ものなどはそれを讀んだ當時は可成眞實らしいやうに思はれたが、實況を見た今はそんなものは全く無關係な不滿足なものとなつた。だが一般に信じられてゐる思想(かんがへ)はこの渦も亦フエルロオ群島の間にあるもつと小さい三つの渦と同様に、岩壁にあたつてせきとめられた水が潮のさしひきによつて昇降し、瀑布となつて落下する際の波浪の衝突によつて生ずるものに外ならない。そして潮の昇ることと高ければ高いほど降ることもまたそれ丈深くなるといふ譯で、渦はその必然の結果である。渦が有つてゐる驚くべき吸引力については手輕な實驗によつてもよく分る通りだといふので、これは百科全書に見える言葉である。キルヘル其他の學者はメールストロムの中心に地球を貫いて、或る遠い〳〵世界に通ずる深淵があると云つてゐる。一例を記せば或學者の如きは餘程確かなものとしてボスニア灣をあげてゐる。この意見は單に意見としては馬鹿々々しいものだが、實際を見た時、私の想像は最も容易にこれに同意した。で、案内の老人にこのことを話したところが、彼は成程それは諾威人一般の

觀察ではあるが、自分の意見は違つてゐると答へたのには寧ろ驚いた。最初の意見即ち渦の起る原因に就いてはとても自分には分らないと云つた。私もこれには同感である、何故(なぜ)ならたとへ紙の上では合理的でも、深淵の雷鳴の中で考へると、全然譯の分らないことになつて仕舞ふのだから。

老人はかう云つた。

「もう卷を御覽になることはこれで十分でムいませう。もしこの巖の周りを廻つて、風陰(かざかけ)で、おまけに水の音もさうひどく聞えない處へ來て下さるなら、そこで私は御前樣に御話いたしたいことがあります。その話で私がモスコオストロームについて、多少知つてゐるのを道理と御信じ下さいませう。」

私は彼の言ふまゝになつた。やがて彼は話し出した。

「私と私の二人の兄弟とで以前大凡七十噸程の帆船を持つて居りました。その船で私共兄弟はモスコー島を越してウルグ島に近い島の間でいつも漁をいたしました。全體、潮の騷ぐ處は其處へ乘り出す勇氣さへあれば漁にはいゝものなのですが、このロフオデンの漁師の中では今申したやうな島々まで出掛けて、極つた仕事をするものは只私共三人丈でムいます。普通の漁業地と申しますとずつと南よりの餘程遠い沖合で、そこなら危險なしにしかも一日中漁が出來ると

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

險なしにしかも一日中漁が出來ると來て居りますから多勢の人が集つたものです。けれどこの岩の間は只いゝ魚がとれるばかりでない分量も多いので、勝つ丸の小さな奴等が一週間もかゝつて捕る位の魚は僅一日でとつてくることもよくありました。まつたく私共は向ふ見ずな山をしてゐたものでムいます、勇氣を資本にし、生命を勞力のかはりに投げ出して。

「私共はこゝから五哩程上の小さな灣の中に船を繫いで、天氣のいゝ時は十五分間の干潮を利用して、渦のずつと上の方でモスコーストロムの本流を渡つて、割合に潮の靜かなオッテルホルムやサンドフレエゼンの近くの碇泊處に錨を卸すのが習慣になつて居りました。私共はそこに次の干潮の時刻が來る迄留つて、そして引返すことにして居りました。往復ともにこれなら確に大丈夫な風だと信じられる時でなければ決して船出はいたしません。そして私共はこの點でしくじつたことは殆どありませんでした。六年の間にたつた二度、この邊には全く珍らしい程の凪のために、錨を下したぎり一夜を過さねばならないことがありました。又一度などは着くや否やひどい暴風が起つて、思つて見た丈でも恐ろしい程に海峽は荒れ騷ぎ、私共は殆ど一週間も餓え死にしさうになつて漁業所に泊らなければならなかつたことがありました。此場合もし逆流の中に乘り込まなか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つたならば何としても私共は沖の方へ押し流されたに違いありません。(逆流といふのは時々方々に澤山現れて、今日はこゝにあるかと思ふともう明日はなくなるといふやうなのです)。この逆流によつて私共はフリイメンの風陰に流され、そこに幸にも船を停めることが出來ました。

「私共がこの漁業場で出逢つた難義の二十分の一もお話することは出來ません。こゝへ乘り入れることは天氣のいゝ時でも危險でした。けれどモスコースロームの渦に丈はどうかかうか卷き込まれもせず無事にやつて來たものなので御座います。尤も或時などは干潮の時間より一分ばかり早かつたり又は遲かつたりしたために、膽を冷すやうなことはありましたが、又どうかすると出立の時思つたよりは風が案外弱くて潮流に妨げられて思ふやうに船が進まないやうなこともありました。私の一番上の兄は十八になる息子をもつて居ますし、私には丈夫な息子が二人あります。こんな時、この息子達がゐてくれゝば船を漕ぐにも又後に漁をするにもどんなに手助けになるか分りません。けれど自分達こそ危險を冒しますけれど、年の若い奴等までも危險の中に入れやうとは思ひません。と申すのも詰りはそれが怖ろしい危險なことで、しかも事實だからで御座います。(未完)

らいてう譯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

群衆のなかに交つてから

——紅　吉——

世間と云ふものを見ずに今日迄生きて來た私には意識と理解力がすつかり缺けてゐました。私はついぞ今迄私の行爲について只の一度でも反省したことがないので御座いました。

その爲めに私は卑劣な人間、僞つきな人間、そして自己辯護の上手な人間として或る友人から注意を受けました、私自身は、全くなんにも知らない人間で御座いました、意識がまるつきりないのですもの、全く無理もない事で御座います。私はこれから新らしい修養をせねば生きることの出來ない人間に突出されてしまいました。私自身はじめて、こんな風になつてしまつたので御座います。勿論意識と理解のまるで缺いでゐた今迄の私の行爲は不眞面目であつたに相違御座いません。

私自身いくら僞を知らない幼稚な子供で濟ましてゐましも、到底人がそれを許して來れなくなりました。私は世間に、こうして追々突き離されて、そして人間らしく仕上られて行くのかと思ひますと、心細くて、恐ろしいので御座います。人と名のついてしまふ以上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は全く自分とは別の物に相違はありません。いくら友人でも、いくら戀人でも、いくら兩親でも、兄弟でも、みんな、人なのです、別の人なので御座います、どれもこれも工業的に機械的に化學的に科學的に作り上げられてしまつた人で御座います。そのなかに交つて、いくら自分を愛してくれ、自分を知つてくれと叫むだつて、それはその終極迄は屆く道理が有りません。

それを知らないでいくら聲を枯して呼むだつて身體を悶へて待つてゐても、到底期待してゐる返事の來る筈もないのです。

私は今迄その馬鹿者だつたのです、そんな人の澤山、も澤山一ぱい居る内に立つて、そうです群衆のなかに投げ込まれてゐて、そして大きな聲で呼むでゐた馬鹿者です、返事の來ることを待つてゐた馬鹿者だつたのです。

人はその内にどしどし私一人をいつ迄も同じ地點に立たせたまゝ、遠慮なく過ぎて行きました、私はそれも氣付かず只岬に立つてゐる燈臺の樣に、違つた舟の入つたり出たり過ぎて行くのばかり見てゐたのです。

けれど私も群衆のなかに飛込むで一所に動く時が今やつと來たのです。

私は、自分の叫に對して返事の來ないのを遂々怒つて動搖し出しました、そして、他の方

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

面に助を求めてゐました、私の激した氣分だけで。それがそれが、時のすぎた今になつてやつと、解つたのです、その返事も同時に來ました、私は、一人遲れた子供になつて、今これから動くので御座います、私は今迄、至極子供だと思つてゐました、正直な、僞をつかない子供だと思つてゐました。けれど私が動搖してゐた毎に、私は大變汚ない手段で自分を慰めてゐたのだそうでした、私は友を賣つてゐたのだそうでした、僞つきだつたそうです。

私はこれらを適切に自分の前に擴げられた時本當に、眼をつぶしたく思ひました。

私は、全く意識と理解力のない子供で御座いました、その爲に澤山の人を非常に困惑な位置に立たせて置きました、私は、そうです、全く意識しないで、澤山な僞を平氣でいつてゐたのです、いつの間にか卑劣な行爲を作上げてゐたのです、私の後には、もう冷い惡魔がつき廻つてゐたのです。私はそれも知らないで尚も自分を正直な僞つきぢやない子供だと思つて紹介しておりました。全く今になつて考へて見ますと、どんなにか私は自分の惡くなつて來たことを氣付いてゐなかつたのです。

こんな盲目的に自分を見てゐる人が恐らく私以外に有ると思つてゐらつしやいますか。

私は今、あらためて私を紹介します。私は僞と知らずに僞を知つてゐた人間でした、正

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

直だと思つて不正直なことをしてゐた人間でした。まるつきり責任と云ふものを考へて見ない、人と云ふものを見もしない、僭越な、我儘な奴だつたので御座います、私は脩身を全く知らない子供で御座いました。意識力の欠けてゐる理解力の欠げてゐる人間だつたので御座います。私はそれだけよりない子供で御座います。

それで今度拾一月號の編輯が終ると同時に私は青鞜社を退社致すことになりました。この事は最初から終り迄私一個の心なので決してその間にちつとの無理だつて挾まつてはおりません。

私が入社してから荒々九ヶ月、春が過ぎて夏と秋が過ぎて、もうあの寒い冷たい思つてもいやな冬が來やうと云ふ時、私は、青鞜社から歸へつて逝きます。

可成り長い間で御座いました。

編輯室の隅つこから、我儘な唄を歌ひ出して、あばれたり泣いたり、大變面白く暮しておりました、社の爲になることは只の一つもなく、なりそうなことはいつでも豫告で濟していつもいつも迷惑なことばかり致しておりました。その御詫びも出來ない内に私は遂々社から歸へつて行くので御座います。

これから青鞜もだんだん育てられて行きませう。朱にまじはれば赤くなると申します。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

全く不眞面目な分子のゐたと云ふことは青鞜にとつて大變悲しいことで御座いました。私はこれから元氣で正しい道を歩む様に腐心しております。只正しい道を行くことです。そして自分を充分反省することが出來たなら、自分自身を全く意識と理解で動かして行くことが出來て來たなら、再びお目にかゝる時も來ることゝ信じております。

この月の編輯は小林氏と二人でやる心組で御座いましたが、校正間近で私の心に少し變動が起きたものですから不責任なことを澤山やりました。今度の青鞜は小林氏の熱心な働で出來上つたことを私は感謝して置ます。

この青鞜は私にとつて最終の編輯にあたつたので御座います。私は何故か涙ぐまれてなりません。立派に出來上つて私の眼にふれた時もう私は青鞜社から歸へつてしまつた時で御座います。私の眼はもう涙で曇つてゐます。私は、涙と光りでこの原稿をかき終へます。ぢや左様なら、私は今もう歸へつて行きます。左様なら、さようなら、お山の日も暮れて來ました、私の友達はみな枯木を拾つて里に、村に歸へつて行きます、私一人危くあとに殘されそうです、さようなら、さようなら。

ごんごん流れる私達のあたりに、私もこれから廻つて流れて行くのです、さようなら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大正元年十一月十六日ヨリ二十五日迄十日間
（午後五時開場）有樂座ニ於テ擧行

二十世紀　四幕

バアナアド、ショー氏作
松居松葉氏譯

ファガス、クランプトン（快走船の製造家）　東儀季治氏
ブーン（王室辯護士）　加藤精一氏
フィンチ、マッコーマス（辯護士）　武田正憲氏
給仕人　森英治郎氏
ヴァレンタイン（齒科醫）　土肥庸元氏
クランドン夫人（女流著述家）　松井須磨子氏
グローリヤ、クランドン（夫人の長女）　都郷道子氏
フィリップクランドン（夫人の長男）双生兒　横川唯治氏
ドーリー、クランドン（夫人の次女）双生兒　和泉房江氏
其他女中、給仕人二名

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文藝協會第四回公演用脚本

二十世紀（You Never Can Tell）梗概

英國　バアナアド、ショー氏作
日本　松居松葉氏譯

脚本の荒筋を書きつけて居る「今日の英國劇壇」の著者伊太利のマリオボルサも、此脚本の梗概を書く事だけは、極めて難かしい事だと云つた。全く彼の云つた通り、「どの幕でも三四人の人物が、ひつきり無しに全速力で喋舌りつゞけて居る」のだから、とても一頁や二頁では荒筋だつて書けはしない。幸ひに松居松葉氏の譯本も出版されたから、委しくはそれを御覽を願ふとして、ここには荒筋の荒筋だけを御紹介する。

處は英國の或海水浴場、時は明治二十八年の夏、十八年前に肌が合はないために夫から離縁を取り、三人の子供をつれて亞非利加はマヂーラへ行つて居た閨秀文學者クランドン夫人は總領娘の敎育が氣になるので英國へ歸つて來て、此海水浴場のマリーヌ、ホテルへ滯在して居たが、一日次女のドーリーが齒科醫へ行つてるのを迎へに行くと、二人娘と次女と双生兒のフィリップといふ悴から、今迄隱して居た父親の事を尋ねられる。いろ〳〵胡

麻化したが現代的に育て上げた高慢ちきの總領娘は飽くまで自分の權利を主張して母親を追窮する。併し自分にはホテルで待ち合す人があるので、その場は外したがその後へ齒科醫の大家さんのクランプトンといふ人がやつて來て、三人の小供に招待されてホテルへ午餐に呼ばれて來る事になる。（以上第一幕）そこで其午後、ホテルの庭へ午餐の食卓を設け、昔からの賴みつけの辯護士マッコーマスや親子四人それから、齒科醫と其大家さんとで、面白く食事をしやうといふ間際になつて、其大家さんなるものが自分の夫で、三人の子の父親と分る。父親は昔風な人だから、小供たちの現代式な不作法が氣に入らず、結局大波瀾が起つて食事は中止になる。と、此王室辯護士を悴にして居ながら、自分はホテルに給仕人をして居るといふ飄輕な老人が居る。これが一座の調停で盡力したが、大破裂になると一人でクランプトンを慰めて、自家一流處生哲學「さきの事は分るものぢやございません」を振廻す。併し高慢娘のグローリヤが飽くまで冷淡なのでクランプトンは、天性の強情も力なく家へ歸てしまふ。後へ廻つて齒科醫が「一目の戀」に落ちたグローリヤに對して極めて理智的な、而して變化自在の口說きかたをして、全然參らせてしまふ。（以上第二幕）母親のクランドン夫人は、その後齒科醫がグローリヤに對して、接吻をしたりなにかするといふ事を、双生兒の同胞から聞いて。ヴァレンタインに苦情をいふと、反對に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舊式な婦人扱ひをされて飜弄される。そこへマツコーマスがやつて來て、もう一度先夫に逢つて、仲直りをしろと忠告する。一同此辯護士の雄辯に感服して、午後九時を期して再會を約束する。此間にも現代的の戀人だらは、理屈を云つてはいがみ合つて居る。(以上第三幕)其夜九時に一同會見する事になると、マツコーマスの親分の王室辯護士で、例の給仕人の悴のブーンといふ男が、マツコーマスに賴まれて調停にやつて來た此男雷霆の如き聲で鋭どく敵の急所を衝き、好きな事を云つて一同を煙に捲ひてしまひ、ぐづ〱の中に一同に仲直りをさせる。たゞ〱歯科醫と高慢娘との關係だけは双方がだん〱理性から情の方に傾いて來るにつけて嫉妬を燒いたり、怒つたりするので、仲々かたがつかない、が、結局これも結婚の約束が出來て、萬事がめでたし〱になる(以上第四幕)といふ極めて複雑な、極めて波瀾の多い筋である。現代の病所をのゝしり、新しがりの腹の底をえぐり忽ちにして悲劇、忽ちにして喜劇。涙あり、笑あり、文學的作品として價値高き作であると同時に、たゞのお芝居としても、極めて面白い狂言である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冷たき魔物 ―紅　吉―

冷たき魔物は
今ここに、
赤裸な人世の前に
生贄ごられた子供の肉軀は
只消へて逝くよな響をたてて
びくりびくりと動いてゐる。

冷たき魔物は
今ここに、
盲目の子供、追ひ出された子供
丸裸にされて投げ出された子供。
秘密から生れた

お前と云ふ魔物冷たい魔物
虚僞から生れた
わたしと云ふ子供、赤裸(あかはだか)の子供。

不可思議の思ひ出は
眞赤にむかれた子供の肉軀の陰にかくれ
恐ろしい顏して黒耀石のなかからぞのく。

ぐりぐりに捲かれた子供の肉軀
赤く血のにぢむ子供の肉軀
冷たき魔物はそこに、ここに。

ぢいつと見ろ
ぢいつと見ろ
なんだお前は、
お前は俺の顏が見られぬのか

馬鹿、馬鹿、馬鹿。

赤裸の子供は、
虛僞から生れた赤裸の子供は
皮をむかれたまま
只びくりびくりと動いてゐる。

おいつと見ろ、
おいつと見ろ
なんだ、子供、赤ん坊、玩具、
この眼の二つが見られぬのか
馬鹿、馬鹿、馬鹿、
僞つき僞つき僞つきの子。

生膽とられた丸裸の子供は
横たへられた人世の溝の前に

只、びくりと動いてゐる。

冷たき魔物、
秘密のなかから生れて來た
お前と云ふ冷たい魔物
子供は盲で聾で丸裸。

赤裸の人世の前に
生贄とられた丸裸の子供は
眞赤い玩具を抱いたまま
只びくりびくりと動いてゐる。

冷たい魔物、
秘密のなかから生れた冷たいお前と云ふ魔物
横になつてゐる溝の傍には
もう肉軀の粉が襲つてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さようなら
さようなら
破られた調子と
亂された調子、
葬はれた調子で
丸裸の子供は死んで逝く。

さようなら、
さよなら
赤裸の人世の前に
虚僞から生れた私と云ふ
その赤ん坊は死んで逝く
さようなら。

——拾月二十九日文祥堂の二階で——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

秋も、深くなつてしまひました。丁度十月の十七日の事でございます。その日私共は可愛い、「青鞜」と云ふ子の一年の、御誕生を祝ふために鶯谷の「いかほ」に集りました。前の日の夕方は、灰色にくすんだ、雲が、西へ西へと流れて、行つて、明日の御天氣が氣にかゝる程でしたに、その日の朝は、すばらしい上天氣で、澄んだ、紺青の秋の空が、頭の上にはてしなく廣がつて、胸の中はうれしさと、たのしさで、わくわくとするくらいでございました。東京の方は勿論東京はなれた、遠い社員の方々まで、この日のために御出京になつて下さつたり、贊助員の方々も、御いそがしい中をまげて御出席下さつたり、ほんとうに、私達は、その日を、うれしい日にする事が出來たのでございました。

初對面の、御あいさつも、うちとけて、それからそれへと、話の花が、咲きはじめ立ちさわいでゐた人々もちつと、落ちついて座つた時は、もう夕暮の淋しい色がみなぎり出して赤い燈のほゝ笑を、見る頃でございました。

はしやいた、蓄音器の歌に、そゝくり出てられし、うれしさによつた、人々の顏……氣もちよく、すつきりとお話をする聲も、咽喉をすべり出でゝにぎやかな、その夜の宴はいつ、果てるとも思はれませんでした。

「又御目にかゝります、それでは、サヨーナラ」と、名殘惜しい聲をのこして、青い、美しい月光を肩にあびて、路を行く皆さまを御見送りしたのは、その夜の八時頃でございました。黑い水の池の中では、時々思ひ出した樣に、鯉のはねた音がして、池にたれさがつた、しほらしい、しなだれた柳の髪は、ちつと月影をうけて、玉虫色に光つてゐました。おほつかない足どりながら一年を歩んで、こられた「青鞜」のお祝ひもこれですんだのでございます。

終りながら、色々と弱いこの子の足をさゝえて下さつた皆さまに、心から、御禮を申上ます、そして、未だ、行手にはいろいろな、あぶなつかしいものが、横たわつてゐると云ふ事を、私共は覺て置かなければ、ならないと存じます。

（歌津）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は今文祥堂の校正室に自分の書いた「群衆のなかに交つてから」の校正の出るのを待つてゐます。私が青鞜に關しての仕事をするのも今日限りで御座います。私は退社しました。私は退社しました。けれども決して無理なことがその間に挾つてはないのです。私一人の心で最初と最終の仕事をして歸へつて行くので御座います。

ですから私の退社について決して不審を抱かない様に私から改めて御願ひ致して置きます。

今も文祥堂のいつでもニコ〳〵してゐる人が入つて來て私の退社を不思議さうに聞いてゐました。そしてお嫁に行くんですか、なんて云ひ出したので自分のこと乍ら驚いてしまいました。

そんな立派な仕事が出來るようなら私自身の生涯も極めて安心なものです。健全なものです。可哀そうに、私にはそんなことがまだまだ遠いので御座います。

私のこれからの生活は自分でもさつぱり見當がつかないのです。自暴な生方か眞面目な生方か、今の亂れた「苦悶」の心ちやさつても正しい途には歩くことが出來ません。

自分は子供だ子供だと思つて今日迄あるいて來たのです。その子供は只無邪氣な、そして正直一點張りたとばかり思つてゐました。けれど、けれど、その子供は僞つきを知つてゐました。

僞つきの子供だつたのです。

自分で遠慮ない途を歩いてゐた途中で全くそんな子供になつてゐました。

私は油斷の多い子供でした。いつもいつも自分と云ふものに張つた力を有たせてゐない至極泰平樂な子供でした。

退社したと云ふことについて愚にもつかないことばかり書きました。只私の退社と云ふ動機と結果は、退社の詞にかへた「群衆のなかに交つてから」を讀むで下すたら一通りはお解りになることと思います。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あの原稿も六號一段にくむで置いた筈なのでしたが、活版屋の間違ひで麗々しい五號活字に姿をかへてゐたのです。活字をくむだ後なので今更どうにもならないのです。

六號の筈のものが五號になつたことをお詫ひして置きます。

外に私の最後の創作として生れてから始ての長篇をかいたのです。

それには私の心と云ふ心が一つ殘らずに含まれてゐたのです。

けれど出來上つた日に私はそれを青鞜に出せなくなりました、そしてそのまゝらいてうに送つてしまつたのです。

それは「破調と葬調」と云ふのです、只記憶して置いて下さい、破調と葬調を。

編輯室よりで私を書くのも今日限りです、私はこれから青鞜のだんだん立派に育つて行くのを見てゐるばかりです。

冬が來てしまつたら私はらいてうと一緒に伊豆の大島から小笠原島から八丈ヶ島から、あすこらの島を廻つて來年のお正月が過ぎたら、歸へつてくる筈たつたのです。私は、その話の出た日から、もうあすにでも船が出る樣な騷ぎをやつてゐたんですがもう、そんなことが出來なくなりました。私は今、生膽をとられた子供の樣になつてぢいつと考へてゐる樣な空氣に抱かれてゐるのですもの。

いつが來たら、八丈島に渡れますことやら、そんなことでも待つてゐなけりや生きて行けない子供になりました

勝ちやんはまだ來ません、私の校正もまだ出ません、こうしてゐる内にたんたん私と「青鞜」が離れて行くのです。

（紅吉）

□寄贈書籍

春陽堂發行
小野賢一郎氏の「溝」
森田草平氏の「初戀」

コドモノ繪　中西屋書店より

「溝」「初戀」は本月號で評をかく筈だつたが時日切迫の爲來月號に載せることになつた。

□寄贈雜誌

三田文學　早稻田文學
北方文學　モザイツク
劇と詩　藝文
みづゑ　シバヰ
スバル　東洋時論
歌舞伎　ザンボア
紅塔　俳味
六號雜感　短歌
學燈　奇蹟
ホト、ギス　新人
詩歌　アラ、ギ
新女界

以上。

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一冊金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■社費は一ヶ月金參拾錢にして毎月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝを便宜とす。
■廣告料（一頁）拾五圓　半頁（八圓）
■振替貯金口座は（東京五六一四）に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと）。
■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は萬年山内靑綌社へ。
■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。
■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正元年十月卅一日印刷納本
大正元年十一月一日發行

禁轉載

東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山内
靑綌社内
編輯兼發行人　中野初

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷所　文祥堂

編輯所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内　靑綌社

發賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店
電話京橋一六三九番
振替東京五六一四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋が來た・夜長に成った・冬が來る

版　五版　三版　再版

フランデス氏著　中澤臨川氏譯

露西亜印象記（ロシアインショウキ）

▲小杉未醒氏裝禎▲全一冊▲定價金八拾五錢▲郵稅八錢

ゾゼンや、スチニアードミルに私淑して居た猶太人ゲル、ブランデスの傑作の一つです。島崎藤村氏は苟も文學を愛好する者には是非一讀させたい、臨川氏の譯筆は現時の文壇に眞に尊重すべきものである　と言はれました。兎も角一瞥を望みます。

窪田通治氏著

空穂歌集（ウツボカシウ）

▲平福百穂氏裝禎▲全一冊▲定價金八十五錢▲郵稅八錢

氏の短歌と長詩とを蒐めた瀟洒な綺麗な本です、內容も裝釘も一種の異彩を帶びて居ます。氏の詩は曙の靜けさがある、夕暮の寂しさがある、有明月の爽淨がある、夕時雨の淒意がある　と言はれて居ます。

窪田[illegible]著

評釋 伊勢物語（イセモノガタリ）

▲橋口五葉氏裝禎▲全一冊▲定價金八十五錢▲郵稅八錢

清新な、艶麗な才筆を持て批評を試み、且つ精細な註釋を加へたものです。伊勢には『源氏』に得られない興味と妙味を秘藏して居ます。書肆の店頭で一度、繙いて見た者は必ず買つて行く人ださうです。……………

吉江孤雁氏著

青空（アヲゾラ）

▲近刊發賣忽ち再版　▲全一冊　▲定價四十五錢　▲郵稅四錢

孤雁氏得意の近作二十餘篇を收めたものです、大空の高き光に己が姿を照し靜かな默想に耽けるべきの秋、其の自然の響き、情緒と瞑想の微妙なる自然の姿を深く味はんとする人々に薦ます。

發行所　東京神田區裏神保町（振替東京一二三番）　中興館

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岡田八千代女史編

閨秀小説十二篇

源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小説に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き盛觀はあらず本書は現時の傑出せる作家より特に十二篇を撰びたるもの鋭敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つの感覺て紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし

洋装四六判
三百餘頁
装幀瀟洒優美
定價拾五錢
郵税六錢

故樋口一葉女史遺稿
幸田露伴君序

再版

一葉全集

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四十四卷は、女史が晩年六年間の記録にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也。人生に對する偽らざる觀察誌也。亂調なりし當時の文壇裏面史也。増訂一葉全集は、從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此比類無き祕書と、女史が小説及隨筆の未た公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩篇合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾無からん敢て薦む。

全二冊菊判上製總布美本

前編 日記及書簡文範
紙數八百五十餘頁
正價壹圓七拾錢 小包料十二錢

後編 小説及隨筆
紙數五百九十餘頁
正價壹圓貳拾錢 小包料十二錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

長谷川時雨主催

舞踊研究會

第三回開演

滅びてゆく古曲と新作の曲とを研究的に演じてみる會でございます。

十一月十日に第三回を開きます。井上流の「扇八島」、「紅葉賣」、藤間流の「鞍馬獅子」外一曲を出します。尚花柳流の名手市川段四郎夫人こと子氏に懇望して「山姥」の一曲を演じて貰ふことにしました。

入會御申越次第、開演の度毎に集金人に切符を持たせて伺はせます。

今回は普通、特別の會員制度を改めて皆一様にすることに定めました。

會場——芝公園紅葉館。會費——金壹圓

切符は當日會場でも求められます。

京橋區新佃西町三ノ五長谷川方

舞踊研究會事務所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

畏くも宮内省御買上の光榮を蒙り天下無類！

内外各博覧會ニ於テ

名譽賞牌受領

みやけ油

登録商標

東京人形町通

木村三宅堂

すき油　びんつけ油

家庭重寶

粉末石鹸

（本誌愛讀者に限り一割引）

發賣元

東京市日本橋區人形町通り

三宅堂本舗

電話浪花六二〇・振替口座八七五一

村井弦齋先生の賞賛の辭に曰く

日本一の純良髪油にして常にお用ゐになれば、第一髪のさきをからしません、まツ黒に光澤麗しく髪がしなやかになり、何時も洗髪のやうに、さらさらとして粘らず、殊に産後又は病後髪が抜ける場合等に用ゐて髪の發育を速かにしますから以前よりも長くふさふさとした洗い髪となります、又頭の病にかゝる事なく、のぼせをしづめ、ふけを取り老年になりても白髪になること遅しと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

原稿用紙

■大判（藍色刷）二十字十行百枚綴

■大判（褐色の色紙へ墨刷）同　上

■小判（朱色刷）同　上

定價各一冊十五錢　送費一冊四錢

右三種紙質は最も精良なるものを撰み
發賣いたし候間御愛用願上候

發賣所

東京市京橋區京橋際

東雲堂書店

電話京橋一六三九

振替東京五六一一四

純文藝雜誌

朱欒

第二年第十一號

十一月號

定價二十五錢　送費二錢

■故青木繁君（蠱惑的畫家—傳說と印象）	蒲原有明
■時計（ボドレエル）	無名氏
■Kismet（リルケ）	茅野蕭々

詩集

權	三木露風
冬が來る外二篇	高村光太郎
ルーバアイヤウト二十三章	増野三良
僧侶生活の卷より（リルケ）	茅野蕭々
暮秋悲歌	三上白夜
小詩數章	松村牧雄
騷擾（ブリユーソフ）	葉村滋
時計	宇野喜代
隅田のほとり	西村小徑
監獄の眞晝外數篇	北原白秋
詩	木下杢太郎
續々哀傷篇外歌數章	北原白秋
朱欒詠草	
■北荷蘭の四日	石井柏亭
■橘の實る國（三）	數嗔數喜生
■ふさぎの蟲外二篇	北原白秋

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五一六一四）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文藝雑誌

黒耀

第一年第二號

定價二十五錢
送費一錢五厘

拾一月號内容

朧（小説）……西村小徑
海樓（詩）……佐藤春夫
ラビ・エヅラ（飜譯）……小澤愛圀
なかうご（小説）……増田廉吉
最初の謎（歌）……金澤種美
人形の前（小説）……佐野良太郎
濟ちやんの生立（小説）……中野穰
場末をまわる一座（小説）……田中落穂
落葉する夜（戯曲）……服部塔歌
老朽語（評論）……馬場孤蝶
服部塔歌を弔ふ……同人
モンスタア（隨筆）……同人

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四） 東雲堂

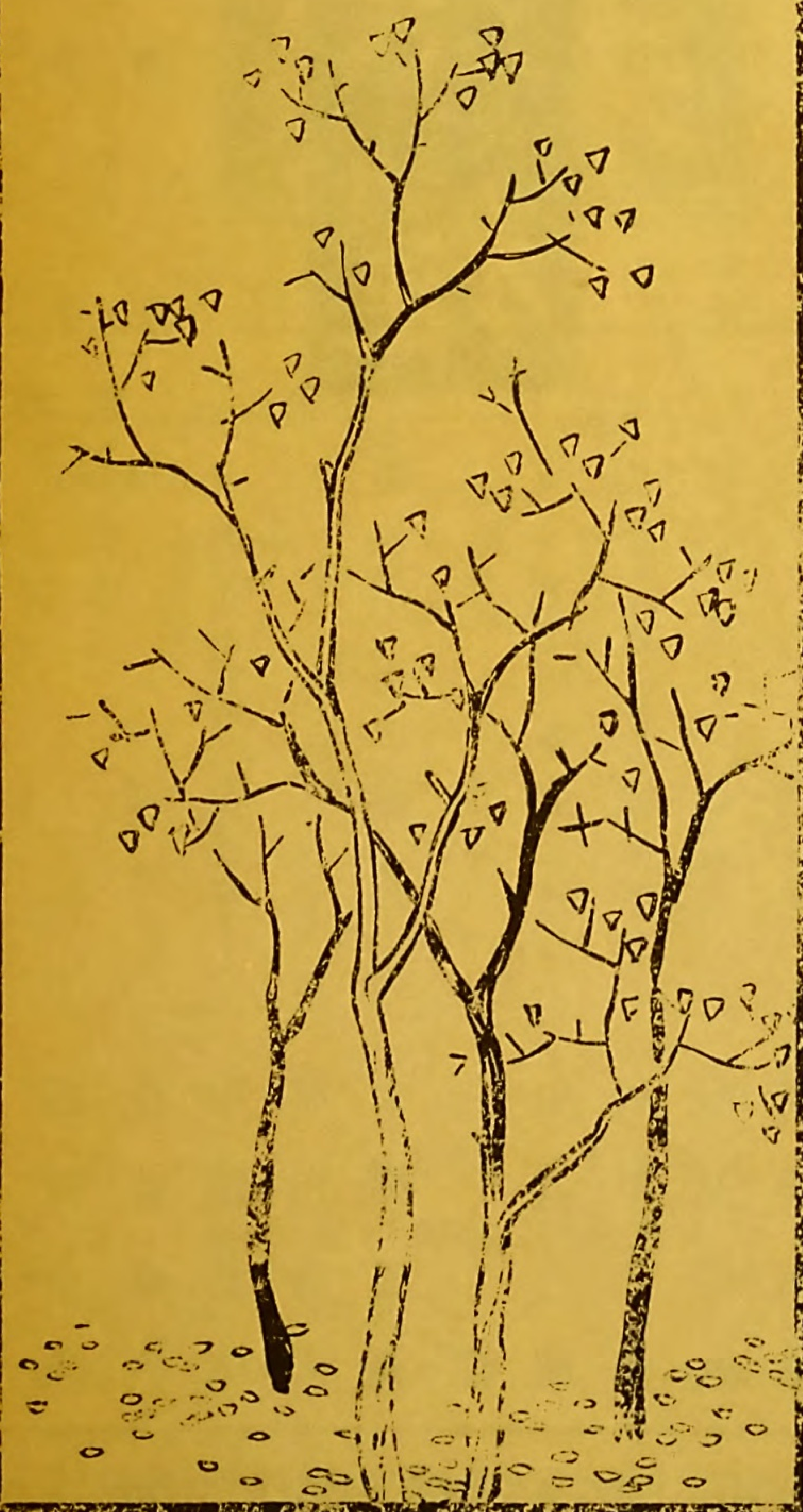
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歌集

死か藝術か

新裝發賣

東京
京橋際
東雲堂



若山牧水氏著

內容

手術刀
落葉と自殺
かなしき岬

裝幀

四六判總クロオス美本
定價金七十錢
送費金八錢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉井勇著

水莊記

山脇信徳畫
齋藤與里畫

内容

■水莊記
■苦痛の谷
■山上哀話
■戯曲「無智の序」
■湘南秘事
■七尺牘
■海郷異志

新刊發賣

奇しく凄艶なる七篇の物語を收む。

菊版頗美本
本文黒青二度刷
挿畫二葉
定價壹圓
郵税八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

北原白秋氏著及畫

本文朱黑二度刷……歌二百余首及歌論
挿畫圖畫數十種……装幀 淡紫と白の瀟洒
定價金八十五錢……送費金六錢

KIRI-NO-HANA.

桐の花

抒情歌集

凡てこれ快くして悲しき氏が内心の息づかひと清新なる感觸の記録なり。今や新装成る。

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地下一尺集第一

木下杢太郎著

和泉屋染物店

富本憲吉氏裝
鳥居清忠氏畫

四六判函入
挿畫三葉
定價壹圓
小包八錢

新刊

戲曲六篇

■和泉屋染物店
■醫師ドオバンの首
■温室
■燈臺直下
■印度王と太子
■十一人の偏盲

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四一番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

石川啄木遺著

悲しき玩具

再版發賣

若くして逝ける天才詩人の面影を傳ふる唯一の書にしてまた實に薄命なりし著者の內面を映せる悲しくも明らかなる鏡なり。

四六判天金美本
定價五十錢送費四錢

第一歌集

一握の砂

賣切

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替貯金東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

發行所　東京市京橋區南傳馬町　振替東京五六一四　**東雲堂**

求むるこころに手をのべよ。遠く行けど静にうたへ。落ちたる塀に纏はる蔦は、悲しけれども力あふるゝものなり。煙や水や山岳や月光や、香氣ある太陽や、これら皆無言にして心を養ふものなり。この詩集の如き僅に著者が心に培かひたる蔦の芽生に過ぎず。

阪本繁二郎畫
三木露風著

四六判頒美本
定價八十五錢
郵稅六錢

詩集

白き手の獵人

（近刊）

詩壇にEPOCHを劃せる書

抒情小曲集

思ひ出

北原白秋著

第六版發賣

小形朱黒二度刷美本
定價金九十錢
送費金六錢

歌集

別離

若山牧水著

第四版發賣

小形著者肖像入美本
定價金七十錢
送費金六錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂書店出版書

歌集	桐の花	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
歌集	水荘記	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢	送費金六錢
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	一握の砂	石川啄木	定價金六十錢	送費金六錢
歌集	悲しき玩具	石川啄木	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢	送費金六錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢	送費金六錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢	送費金六錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
戯曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓	送費金八錢
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢	送費金八錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢	送費金八錢

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

電話京橋一六三九 振替東京五六一四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三巻第拾一號

白樺

特別號

本號特價五拾錢

拾一月一日發行

・定價参拾錢・送料一錢五厘・半ヶ年前金壹圓七拾錢・一ヶ年同四圓卅錢・

目次

▲兎（小説）……長與善郎
▲二つの心（脚本）……武者小路實篤
▲利公の爲に（短歌）……木下利玄
▲追悼會（小説）……正親町公和
▲思ひ出す事（小説）……津田青楓
▲（詩）……高村光太郎
▲（短歌）……吉井勇
▲（小説）……里見弴
▲清一の手紙（小説）……園池公致
▲日記より（感想）……小泉鐵
▲此の頃の感想……長與善郎
▲未定……有島壬生馬
▲ヴィンセント・ヴァン・ゴオホ……阿部次郎
▲ゴオホに就て……武者小路實篤

挿畫

▲La Berceuse（原色版）……ビンセント・バン・ゴオホ
▲オリーブの林……同
▲寝室……同
▲豁間の村……同
▲肖像……同
▲村……同
▲コーヒを飲める男……同
▲村の入日……同
▲少女の肖像……同

發行所 東京麹町區麹町二ノ二 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第五巻第十一號

アララギ

十一月一日發行

○思ひいづる折(四)……たまを
○秋の感想……山宮允
○ほろびの光(短歌)……左千夫
○郊外の半日(短歌)……茂吉
○病院前(短歌)……柿の村人
○富士ゆき(短歌)……千樫
○曉は動くに(短歌)……憲吉
○叫びのこもり(歌論)……左千夫
○「陰影」を讀む……左千夫
○文展西洋畫評……矢口臺三
○文展日本畫評……平福百穗
○「陰影」合評……柿の村人。千樫 憲吉。茂吉
○十月の歌壇……千樫
○碎花氏の「悲しき愛」……憲吉
○天涙氏の「マヒルの山」……茂吉
○ゆふべ(短歌)……文明
○高き梢(短歌)……紫郎
○柳門歌稿(短歌)……柳の戸
○アララギ歌壇……同人

○定價一冊十五錢 ○半年八十五錢 ○一年一圓六十錢

注文は本所區綠町三ノ三十石井方古泉幾太郎宛の事
投稿廣告一切は赤坂區青山南町五ノ八一齋藤茂吉宛

東京根岸短歌會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第四年 第十一巻

スバル

價三拾錢 郵税二錢

崖（戯曲） 古原若水
ひとりの歌 阿部省三
アラジンとパロミード（戯曲） 灰野庄平譯
歌 田中昇太郎外數氏
湘南秘事（小品） 吉井勇
父の死（詩） 茅野蕭々
田舎（小説） 森鷗外譯
秋（詩） 出野青煙
むく鳥通信 無名氏
人に（詩） 竹友藻風
死の勝利（小説） 石川戯庵譯
舞踊（詩） 千葉芙哀
金魚（小説） 五百歌左二郎
ルッソーの懺悔録（紹介） 平出生
消息

東京神田區北神保町二 昴發行所 電話本局四二六四番

十一月一日發行　第十二卷第一號

毎月一回一日發行

特價七十錢　郵税三錢

美術新報

文部省美術展覽會特別號

記事

第六回文展概觀　坂井犀水
名流文展觀
文展日本畫觀　平福百穗
文展西洋畫に就て　石井柏亭
文展の彫刻を論ず　高村光太郎
文展西洋畫批評　木下杢太郎
第六回文展合評　新報同人
秋の諸展覽會　浦仙生

繪畫

立の秋（原色アアトタイプ）　小杉未醒
乳の祈願（同上）　中澤弘光
獨逸の女（同上）　石井柏亭
松上の日の出（同上）　中川八郎
瀟湘夜雨（銑刷アアトタイプ）　橫山大觀
漁村返照（二度刷版）　同
甲ふたる馬（アアトタイプ）　結城素明
矢走、三井（同上）　今村紫紅
寒月（同上）　木島櫻谷
遠浦の歸鴈（同上）　寺崎廣業
六日の月（同上）　南薰造
父（網目版）　朝倉文夫

發行所　東京本郷區湯島切通坂　畫報社
電話下谷二四八三番
振替東京一八一〇六番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純詩歌雜誌

十一月號

詩歌

十一月一日發行
毎月一回一日發行
特價金二十五錢

獨逸文學史上に於るハウプトマンの價値……山岸光宣
詩的と云ふ語の内容……三木露風
泉の族……高村光太郎
休息……上岐哀果
砂……水野葉舟
クロバーの上……佐藤緑葉

短歌

富田碎花
尾山篤二郎
近藤嵐黎
近藤元
廣田樂
田村飛鳥
新妻莞
宍戸信乃
前田夕暮
白日社同人

前月詩壇及前月歌壇

空想者の手紙……若山牧水
リットル・ポエムス・イン・プロカズ（ボオドレイル）……山村暮鳥
にほひ……川路柳虹
さなり汝は幾度か（カー・リドノ）……米川正夫
朝（ボリス・ブデレノスキー）……中村白葉
落葉林より……前田夕暮

社友募集
白日社清規入用者は往復葉書にて白日社宛申込まれたし

前田夕暮作

新刊歌集

陰影

定價金八拾錢
送費金六錢

萬朝報評 歌壇に一時代を劃せる歌集「收穫」以後の作品約六百首を蒐めたるもの也、著者の歌はジメ／＼した生活の反映也、然し石川啄木氏の如き暗憺にはあらで、誦讀の後何かしら白き輝きの胸に迫る感じあり、石川氏のほど絶望的にあらず、又悲喜劇的ならずして一種の潤ひあり、云々

灰色のこころのうへに悲みの花
うす紅み咲きいでにけり

文章世界評 歌集である。氏の第一歌集「收穫」以後の作六百首を收めてある。篇を年に依つて四つに別ち「犀」に四十三年の歌を、「曇り日」に四十四年の歌を、「日に燒くる青草」に四十五年の歌を、「山上より」に大正元年の歌を收めた。それで見ると、氏の唱道した實感歌が今は多量のすぐれた藝術味を帶びて、次第に豐潤な態を備へて來たのが分る。

正宗得三郎氏裝釘

内容
犀
曇り日
日に燒くる青草
山上より

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂
發行所 東京市外西大久保 白日社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

牛もうもうもうと霧から出たりけり　一茶

俳味

十一月號

瘤のあと……（卷頭語）

久保學士說に對する感謝及び疑惑……内藤鳴雪

過去となりし天長節の句……小倉鶴峰

抒情詩としての俳句の力……沼波瓊音

妻を失ひし友の手紙……著述業者

明治俳壇の回顧……天野眞名井

俳味句評……雁來紅子

死んだ赤……頓着子

日本彫刻會を見る……阿羅漢

要目

蕪村と漢學（其八）……久保天隨

俳句……諸家

白豚集……酒井野梅選

私解芭蕉の發句……沼波瓊音

醫者より觀たる子規……醫學士 柳星市

俳味地方俳壇……

俳交欄……

通り雲……レモン法師

竹齋物語（附錄）……（作者不詳）

立てる女（口繪寫眞版）……山東京傳筆

毎月一回一日發行

定價
一部金拾五錢
郵税壹錢

半年分前金
郵税共金八拾六錢

一年分前金
郵税共金壹圓六拾八錢

發行所
東京市本郷區西片町十番地
俳味社
振替口座 東京三四三四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一年 第七號

モザイク

定價一冊 貳拾五錢

拾一月號內容

□春の目ざめ（戯曲ウェデキント）……野上臼川譯
□薄暮（小説）……西田廻瀾
□塔（戯曲）……藤井伯民
□ラ・フオンタン（小説ゴンクウル）……武林無想庵譯
□握手（小説）……水島爾保布
□In the Grip of Alcohol（小説）……清見陸郎
□サニン（小説）……アルチバシエフ
□觀畫の後（批評）……モザイク同人
□表紙繪……川路柳虹
□裏繪……濱田葆光

東京下谷區 モザイク社 中根岸六九

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六卷　十一月號　第十一號

イアリス（サマン）　竹友藻風

少きアイヨルフ（イプセン）　草野柴二

伯林より　長壽吉

マルケン島行　小林萬吾

文部省展覽會を見る　大塚保治

古今集の修辭　次田潤

萬葉集講義　佐々木信綱

破の音頭　上眞行

心　姉崎正治

定價一部金十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢稅共

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一卷
第三號

奇蹟

定價一部
金廿五錢

十一月號

■クリスマスの夜（小説）……光用穆
■内海のスケッチ……宇高信一
■ドガの一面……小林徳三郎
■官能の春（詩）……秋野優
■乳母の死（小説）……舟木重雄
■大なる平凡……眞田久吉
■摸索（Breath, not Voice）……峰岸幸作
■同人感想……
■表紙畫……小林徳三郎
■裏繪……川上邦世

東京市麻布區材木町六十九
奇蹟發行所
電話番號芝二二五八

一手販賣所　東京市京橋區尾張町二ノ二六　東海堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代の洋畫

原色版挿畫

オランピア……エデウアル・マネー

漁村……津田青楓

寫眞版挿畫

自畫像……エデウアル・マネー

汽車道……同

肖像……同

文展出品畫……數十枚

ヒユウザン會出品畫……數枚

記事

エデウアル・マネー……木村章

オランピアに就て……齋藤與里

同……高村光太郎

文展合評……諸數氏

ヒユウザン會記……同

郊外寫生に就て……石川欽一郎

其他

毎月一回一日發行　定價三十錢

會員募集

洋畫研究錄

近頃出來た正則洋畫講義錄と間違へられては誠に困る。何某大家執筆とかいふ大層なものとは性質が異ふのである、本研究錄は教へるのでなく、學者が研究の參考に資するものである。それ故に執筆者よりも寧ろ研究材料を豐富に提供して行きたいと思つてゐる、模倣的に教はつた時代は古い幼稚な時である。現下の研究はそんなものでないのである。

詳細見本入用の氏は往復ハガキにて申込なさい

毎月二回一日・十五日配本仕候

發行所　日本洋畫協會出版部

東京市牛込區水道町五三・振替四三七三番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純美術雜誌

ヒユウザン

毎月一回一日發行

十一月號

—(第一號)—

記事

三つの手紙……三並花弟
自己の不滅……松村巽
一片……小林德三郎
思ひ出のまゝ……大和田磐
私信……木村莊八
題未定……高村光太郎
同……岸田劉生
秋（詩）……齋藤與里
苦笑（短歌）……大和田磐
眞面目腐つた繪……眞田久吉
藝術家と生活……同人
GOSSIP……川村信雄
展覽會中の戯書……同人
六號記事……同人
其他……

挿畫

—原色版刷—
郵便脚夫の通る道……川上涼花
靜物……川村信雄
灯の下の女……三並花弟
—寫眞版刷—
自畫像……高村光太郎
支那瓶……バーナード・リーチ
肖像……塚越芽以治
ゴム工場の裏……濱田葆光
虎の門附近……木村章
少女……岸田劉生
—刷込寫眞—
同人の小集……
同人の戯書……
其他……

—(定價一部二十五錢)—

發行所・日本洋畫協會出版部

牛込區水道町五三・振替口座四三七三番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸君は本誌を坐右に欠く可からず

月刊美術雜誌

本誌は本邦最古にして且唯一の水彩畫研究專門雜誌なり

■嵐山（水彩畫原色版）　中澤弘光
■小婦（同）　南薫造
■不忍池（同）
■赤城鈴ヶ峯（同）　故大下藤次郎
■デッサン（寫眞版）　ミュンカクシー
■繪の構造について　中村不折
■對話二件　齋藤與里
■追憶深き野菊　丸山晩霞

みづゑ

十一月三日發兌
第九十三
送料共金廿五錢

■水繪の色について　後藤工志
■海洋の描法　小神野三男四
■英國水彩畫家評判記　石川欽一郎
■記憶に殘れる水彩畫（三）　三宅克巳
■續三脚物語（七）　鶴澤四丁
■日光遊雜記（二）　故大下藤次郎
■大阪に於ける大下氏遺作展覽會　藤田紫舟
■文展見物記　赤城泰舒

發行所　東京小石川關口駒井町三番　振替口座東京三九六三　春鳥會

毎月一回一日發行
一冊二十五錢
郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十九號（十一月一日發行）

六冊前金壹圓五十錢
十二冊貳圓八拾錢

戯曲「ギョッツ」（ギョオテ）……鷗外譯
土曜劇場の「街の子」……相馬御風
喜劇「國境」について……田口掬汀
無言劇に就て……廣政法天
「眞田幸村」の脚本……山崎紫紅
本郷座の眞田……幸堂得知
八百藏と左團次……青々園
有樂座の第一回女優劇を見て……人見東明
默阿彌著作解題……河竹新水
活動寫眞化せるタッソーの詩……吉山旭光
歌舞伎劇保存の議……伊原青々園
喜樂座の羽左衛門……長谷川時雨
「島の女」内幕噺……紫紅
俳優の書ける自叙傳……青々園
十月の脚本……川村花菱
「安宅の關」長唄と鳴物……杵屋勘五郎
乃木將軍の芝居……山野芋作
大小劇見物記……春浦生
浪花座の雁治郎……前田芳柳
二世團十郎の團扇繪と七世團十郎の借金證文……
マラディーヌとバロミード（メーテルリンク）……森ほのほ譯

東京本郷切通坂町書報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三番
振替口座一八一〇六番

△自己を鮮かに內觀し徹底せしめむが爲めに
△燃ゆるが如き藝術的良心と信仰の爲めに
△至醇にして清新なる靈感に生んが爲めに

社友募集
短歌募集

純文藝雜誌

劇と詩

第二十六號
十一月一日發行
定價金三十錢

クープリン論（翻譯）……
吉野川（戲曲）……萩原朝彥
秋の街路（詩）……土岐哀果
太陽の子（翻譯）……ゴルキイ
走馬燈（詩）……福田夕咲
壁畫（小說）……松田良四郎
能（翻譯戲曲）……チエホフ
夕暗の花（歌）……水井優子

孤獨（小說）……小杉寬
卓を庭に（詩）……人見東明
自己表現の藝術（評論）……松村巽
ボンとリルケの劇（評論）……仲木貞一
文展とヒユウザン會の美術（評論）……相馬御風
十月の創作に（批評）……
秋晴と花（歌）……若山牧水選
晩秋初冬（歌）……土岐哀果選
小鳥（表紙畫）……津田青楓
兎（扉繪）……小林保祥
食卓の一部（裏繪）……高村光太郎

發行所 東京小石川區雜司ヶ谷町 劇と詩社

大賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 至誠堂 盛春堂 上田屋 良明堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美術印刷

文祥堂の活字は悉く新鋳で
印刷は最も美術的に完成す
ることを期して居ります
御注文の程宜しく

和洋式帳簿製造
活版石版印刷

東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地

文祥堂印刷所

電話京橋 二一三六八 五番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂地方部

東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番

書籍雜誌取次販賣廣告

御取次に應ずべきは市内發行の圖書雜誌に限り候

■書籍は（原書醫書及現行教科書を除く）……一割引

■雜誌は（新聞を謝絶す）……御注文次第即時發送す

（注意）御注文の節は書名、定價、著者、郵税、發行所等（雜誌なれば何月より何月までと）明細に御認めの上割引價に郵送料必ず添附の上、振替貯金又は小爲替にて御注文下され度、切手代用は二割増と相定め候。

■四十五年一月改正圖書目錄往復はがきにて御申越次第贈呈仕候■

近世文壇の一異彩

最新刊

艶色滴るが如き半玉を見よ

田村西男君作

鳥居清忠君口繪及裝畫

半玉

目が覺める友禪の袖、男を恐ろしいものとは知らず、膝にもたれてお酌する、肩上げ深き契りも知らず、アラよくつてよと夜半を吹く、嵐に散るや簪の、花愛らしきその顔に、露の涙か枕紙、小さき胸の安からで、あの方、この方、夢の曉鐘の聲…

全一册

四六判頗る艶美裝幀

定價五十錢

送料六錢

小説 **藝者**

●四六判 全一册 五十錢 送料 六錢

小説 **又藝者**

●四六判 全一册 五十錢 送料 六錢

小説 **藝者新話**

●四六判 全一册 五十錢 送料 六錢

藝者五大噺

●四六判 全一册 廿五錢 送料 四錢

發行所

東京神田仲町 **辰文館**

（電話下谷五九五五）振替一六八五九番

昭和44年 3月15日発行　　【第3回配本】

青　鞜　第 2 巻（第2分冊）

編著者　平塚 らいてう
発行者　藤 原 正 人
発行所　(株)明治文献
印　刷　正 明 印 刷
製　本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

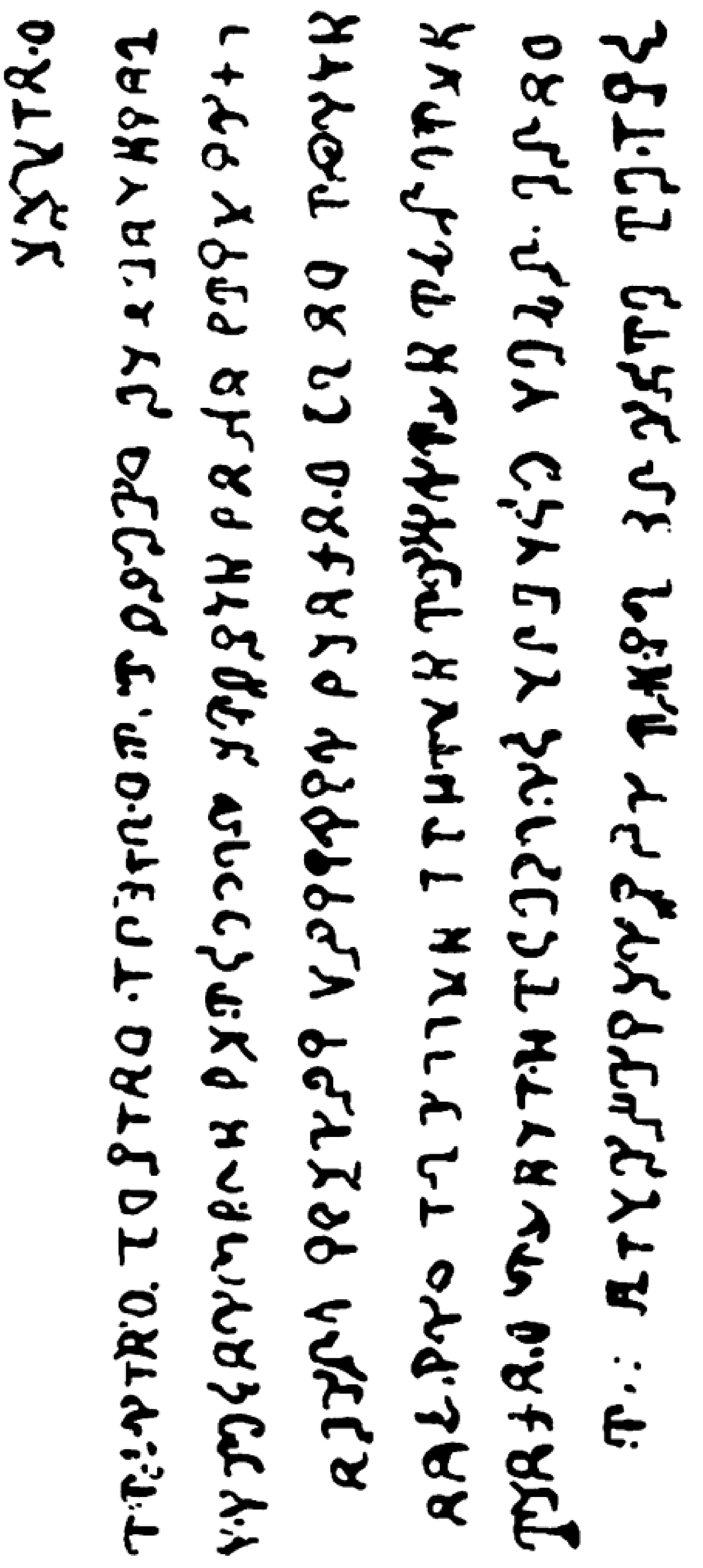
ASN
PER
PL
756
S45
V. 2
no. 11

University of Colorado at [redacted]
[redacted]304 6746238

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER